ひぐらしのなく頃に　闇灯し編

黒狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひぐらしのなく頃に　闇灯し編

【Ｎコード】
Ｎ１３６７Ｘ

【作者名】
黒狐

【あらすじ】
何度も何度も繰り返される昭和５８年６月。
そして繰り返される惨劇。
絶望に明け暮れていた梨花に一つの光が届く。
その光は梨花を助け出すことが出来るのか、それとも惨劇は繰り替えされてしまうのか？
難事件に一人の青年が立ち向かうっ！！！
後書きには第四話からひぐらしメンバーと作者の黒狐がおもしろお

かしくトークし合うラジオ番組『ひぐらしの彩るラジオ』
黒狐とひぐらしメンバーとみなさんがこのラジオに色を付けていく番組です。果たしてどんな番組になっていくのか？

第一話　一つの光

また・・・だめだったの・・・・・・・・・・・・

昭和５８年の６月から私は抜け出せない。何度も何度も挑んできたが、必ず最後に何者かに殺されてしまう。奇跡はなかなか起こってくれない。いろいろなかけらを作ってもなかなか奇跡は起こせない。たまに奇跡は起きるが全てがだめだった。神様はなかなかサイコロの６を出してくれない。

なぜなの。何がだめなの。何もすればいいの。

その問いに何も返ってこない。

誰も助けに来てくれはしない。

誰か・・・・・・この声が届くなら・・・・・・・・・・

私を助けてっ――――――

「・・・・・・・んっ」

目が覚めると、御神雄斗は布団の中にいた。窓からはまぶしい光が部屋に差し込んでいて、外からは小鳥の鳴き声が聞こえてきた。

・・・・・・朝か。

俺は時間を確かめるために部屋に掛かっている時計を見た。

時計は７時を示していた。ちなみに今日は日曜日なので、俺が通っている中学校は休みだった。

もう一度寝てもいいがなんだか今日はそんな気がしなかった。

俺はベッドから出ることにした。

ウォオオオオオオオオオオ――――

一階に降りると母さんが掃除機でリビングの掃除をしていた。掃除機からは爆音が鳴り響いていた。
母さんと目が合った。
どうやら俺が起きたことに気づいたらしい。
すると鳴り響いていた爆音が止んだ。
「あら、もう起きたの」
「おはよう」
「それより昨日、ありがとね」
「別にいいよ。また何か事件があったらまた教えて」
「もうあんたの力を借りないわよ」
「その台詞何回目だっけ？」
「う、うるさいっ！」
母さんは警察官だ。周りからは御神警部と呼ばれている。ちなみに父さんは刑事だ。俺は母さんや父さんの依頼などで、殺人事件や誘拐事件なんかの推理をしている。俺は学校の成績はあまり自慢できるようなものではないが、事件を解決するようなことの知恵はみんなに自慢できる。
昔にある事件に巻き込まれたときに、俺がその事件を解決しだしてから、母さんに呼ばれるようになった。俺は迷惑なんて思ってはいない。不謹慎だが大歓迎だ。昔に難事件を解くために家がある東京から離れて一人暮らしをしたこともある。そのために中学校を転校していた。ちなみに2回転校している。長期休暇中は何回か家を離れたこともあった。
「何か難事件ってないの？」
「さぁ？自分で調べてみたら」
「へいへい」
母さんは遠い所に行かなければならない事件は絶対教えてくれない。
俺が最初に遠出をした事件を教えたのは母さんだった。それから母さんは遠出をしないといけない事件はまったく教えてくれない。

何か後悔をしているのだろう。それとも寂しかったか。
俺はキッチンから食パンを一枚取り出しトースターにその食パンを入れた。

リビングで朝ご飯を取ると、俺は部屋に戻った。
雄斗はパソコンを起動させた。
パソコンでは、いろいろな事件がどこかで起きていることかを調べている。ヒットはしないかもしれないが、とりあえず探している。
するとこんな事件を発見した。

犬飼総理大臣の息子を誘拐！！

見出しにこんなことが書かれていた。
確かこんなことが前にニュースでやっていたな。
そう思い、雄斗は戻るボタンを押そうとした。
しかし、その手は止まってしまった。
でも何か戻ってはいけない気がしたのだ。だからその記事をじっくりと読むことにした。
すると一つの記事を発見した。

雛見沢ダムバラバラ殺人事件

「・・・・・・っ！」
こんなこと知らなかった。そのとき初めて知った。ニュースでも見たことがなかった。俺はそのニュースについての詳細も見た。
×月×日、××県鹿骨市の雛見沢ダム建設にてダム現場の監督が殺害されていた。
そのようなことが書かれていた。他にもそのような事件の関連記

事が書かれてあった。
それらの事件をまとめて雛見沢連続怪死事件というらしい。通称、オヤシロさまの祟り。
雄斗はかすかに笑みを浮かべてから、一階に駆け下りていった。

第一話　一つの光（後書き）

どうもっ！黒狐です。
ひぐらしのなく頃にの初作品『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』が一万アクセスを突破したので、ノリに乗って新たな作品を投稿してしまいましたっ！
『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』ももうすぐクライマックスを迎えるので、そちらの方もよろしくお願いします。
これからも応援よろしくお願いします。

感想待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです！

第二話　転校初日・・・

そうして俺は雛見沢に引っ越してきた。中学校も転向した。親にも許可をもらった。全てばっちりだ。説得するのにとても大変だった。結構怒鳴られたことはもう忘れてしまおう。

話を戻すが、雛見沢にはコンビニやファミレス、自動販売機などが一つもない。隣の興宮市にそれらはあるが自転車で一時間もかかってしまう。不便なところだが山奥なので空気がとてもきれいだ。

今は雛見沢にある中学校の職員室に来ていた。そしてソファーに座っている。

中学校といっても営林所の敷地を貸してもらっているらしい。しかも全学年合わせて一クラスしかないらしい。授業はテキストをやるだけだという。服装は何でもいいらしい。私服でも違う学校の制服でも。俺はとりあえず前の学校の制服である。学校がめんどくさいと思っている人にはもってこいだろう。学力がどうなるかわからないが・・・・・・・・・。上級生は一人しかいないらしい。俺と同じで、引っ越してきたばっかりの中学二年がいるらしい。男子の中では最上級生だ。まったく実感がなかった。でも俺の目的は雛見沢連続怪死事件の真相を暴くことなので、学校とかはどうでもいい。

ガラガラ――

職員室の引き戸が開いた。そこから担任の知恵先生が顔を出した。

「御神君、もうすぐホームルームが始まるので、皆さんに自己紹介をしてください」

「はい」

俺は職員室を出た。

そうして俺は教室の引き戸の前に今いるのだが・・・・・・・・・・・
なぜ黒板消しが引き戸に挟まっている。
・・・・・・・・・いじめか？これは転校生への嫌がらせなのか・・
・・・・・・・？
そういう疑問が浮かんでいるが、とりあえず黒板消しをさっと抜き取った。そして教室の中に入った。
「東京から着ました。御神雄斗です。よろしくお願いします」
いつも通りの挨拶であった。
さっきの黒板消しの件はとりあえずスルーすることにした。
「では、空いているあの席に座ってください」
「はい」
その後ろのほうの席に座った。
「俺、前原圭一っていうんだ。よろしくな」
横の少年が声をかけてきた。
「よろしく」
横の席に座っている前原圭一という人に声をかけられた。
すべて今まで通りだった……黒板消し以外はっ！
漫画でしか見たこと無いぞっ！！！
これから雄斗はさまざまなものに巻き込まれていくことになるのだった。

そしてなんやかんやで授業は始まった。授業といってもテキストをやるだけだが、下級生達は知恵先生が教えまわっている。上級生はほぼ自習のようなものだが。テキストの最初のほうは前の学校で習っていたので何とかできた。たまに手が止まっていたが、そういうことは気にしてはいけない。
そして、お昼の時間になった。この学校では好きなグループになって昼食をとっているようだ。俺は親しい奴なんていないので一人

だ。一人なんて慣れれば楽だ。な、慣れてる……。
　そんな悲しいことを思いながら昼食を取り出そうとしていると前原圭一に声をかけられた。
「なあ、御神。一緒に食わないか？」
「ああ、別にいいけど」
　そして椅子を持って近くに行こうとした。
・・・・・・ん？
　なんと他の人も一緒だったのだ。
　なんだ、他の人も一緒なのか……んっ？
　そこには女子が４人いたのだ。下級生が二人と委員長である中学三年生の人が一人、同じ年のような人が一人。全員が机をくっ付けていた。
　完全に戸惑っていた。
　こんなのは初めてだ。
　黒板消しからおかしなことが続いていくようだ。
「雄斗、早く机を持って来いよ」
「御神君も来なよ」
　あたふたしていると委員長と前原圭一に声をかけられた。
「あ、ああ」
　とりあえず俺は机を持ってそのグループに入った。そこの机では全員のお弁当が広げられていた。とりあえず前原君に聞いてみた。
「パンって持ってきたら・・・・・・まずかった？」
「いや、別にいいけど・・・・・・」
　前原君も困っていた。
「じゃあ、明日から弁当もって来たらいいじゃん」
　委員長が助けを出してくれた。
　はぁ、明日から早く起きないといけないのか……
「わかった。明日から持ってくる」
　そのことを俺はしぶしぶ了解した。
「おじさんは園崎魅音。よろしく。じゃあ次っ！」

「えっ、うんーっと竜宮レナ。学年は同じだよ！よろしくね」
「みぃ、古手梨花なのですよろしくなのですよ。にぱー☆」
「わたくしは北条沙都子ですわ。トラップを避けるなんて圭一さん以上ですわね。まあ、よろしくおねがいしますですわ」
「さっきも言ったが、俺は前原圭一。よろしくな」
一つだけ言ってもいいだろうか？いや、一言で収まるわけが無い・・・・・・突っ込みどころが満載だ。どこから突っ込んでいいかがわからない。さっきの黒板けしの犯人がわかったくらいだ。
「よろしく」
何がなんだかわからないので俺は全てをスルーした。
昼食が始まるとみんながそのグループの弁当を好きなものをとって食べていた。なんだか不思議だった。でもここにいるのが辛くなってきた。でもなんだかここに来てよかった気もした。
そのあと全員と打ち解けた。
それから放課後になった。
これから母さんに大石さんという警察官を進められたので、これから会いに行こうと教室から出ようとした。
「ねぇ、雄ちゃんさー。うちらの部活に入らない」
「入らない」
即答してやった。
「ガーン」
魅音が固まっていたので助けを出すことにした。
「冗談。で、何の部活？」
「我が部はだな、複雑化する社会のため、活動毎に提案されるさまざまな条件下、・・・時には順境。あるいは逆境からいにかにして」
どんな部活だよっ！
とりあえず心の中で突っ込んだ。
そして、俺は口を開いた。
「よしっ、帰る！」
「つまり、みんなでゲームをして遊ぶ部活なのです」

梨花ちゃんが誰でも判るように言ってくれた。
今までの魅音の演説はなんだったんだ。三秒程度でまとまったじゃねーか。
「へぇー、少しやってみようかな」
「先に言っておくけど、我ら部員はそんなに甘くないからね。本気でかかってきたほうがいいよ」
魅音がニヤついていってくる。なんだか腹が立ってきた。
「会則第一条！遊びだからなんていう、いい加減なプレーは許さない！！」
魅音が叫びだした。
「会則第二条！そのためにありとあらゆる努力をすることが義務付けられていますのよ」
沙都子が割り込んできた。
なんかすごそうだな・・・・・・
「で、何のゲームをするんだ」
「じゃあ、誰でもわかるジジ抜きにしよう」
なんか思ったより普通だな。
そして魅音はトランプを俺に突き出した。
「それで罰ゲームは・・・・・・」
へぇー、やっぱり罰ゲームとかあるんだ。荷物持ちとか掃除とかか？
「メイド服を着て荷物持ちなんてどうかな？」
「待て」
「どうしたの雄ちゃん？」
「メイド服なんてどこにあるんだ。あと雄ちゃんってなんだ」
「メイド服ならロッカーにあるけど」
「いや、明らかに全員の体格が合わないだろ。何枚も持てなきゃ」
「全員のサイズなら揃ってるよ！」
親指を立てて俺に突き出してきた。
どうしよう……ついていけない。

あと雄ちゃんの件はスルーらしい。
なんか、どうでもよくなってしまった。
そうしてジジ抜きが始まった。
このジジ抜きがハードになるなんて雄斗には思いもしなかった。
「じゃあ一枚抜くね」
机の中心にそのカードが裏向きで置かれた。みんながそのカードをじっと見ていた。何かあるのか気になってそのカードをじっと見てみた。
・・・・・・ん？
俺はあることに気がついた。そのトランプには傷がついていたのだ。他のトランプもそうだ。一つ一つに傷がついている。
「みんなって、カードの傷でカードの種類って覚えてるの？」
「会則第二条ですわ。雄斗さんも勝つために最善の努力をなさいませ～」
沙都子がニヤつきながら言ってきた。
「そのセリフって前に俺のときにも言わなかったか？」
圭一が横槍を入れてきた。
「圭一さんもそんなことを言っている場合ではありませんことよ」
「何をー」
圭一と沙都子が闘志を燃やしあっている。というか俺の質問はどこに消えた。
「じゃあ、おじさんから始めるよ」
どうやら完全に無視らしい。こうなったら逆転の方法を考えるしかない。できる限りルールの穴を見つけながら戦えってことか。
そしてジジ抜きが始まった。

第二話　転校初日・・・（後書き）

どうも、黒狐です。
一話だけというのもなんだか寂しいので、二話をアップしましたっ！
貯金がなくなっちゃう～ｗｗｗ
次回は雄斗の初部活！！！
雄斗はどう戦うのかっ！？
ちなみにカードの傷を覚えるとかそういう超人能力は発揮しません。
雄斗は勉強が苦手なので・・・
そして、次回の後書きは、いつものようななが～い後書きになりますｗｗｗ
『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』のような後書きです。
その小説はひぐらしを知っていればＯＫです。
一話と二話は別のアニメキャラクターが出てきます。
ザ・クイズショウを知らなくてもＯＫ！！！
なんの問題もなしです。
そうですね。
新たな一つのカケラとしても楽しめるでしょう。
ひぐらしのなく頃に　罪明し編
そう、変換してもらっても構いません。
タイトルはそれと迷いました。
そんな小説です。
この小説とその小説をよろしくお願いします。
では今回はこの辺でっ！

感想待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです！

第三話　雄斗の実力

圭一がニヤニヤしながら俺の持っているトランプを選ぼうとしていた。
「くっくっく、見えるぜ。右から3、5、6、K」
「なっ」
圭一が悪魔に見えてきた。
こいつら、カードの傷を全部覚えているのか・・・・・・・・・・・・・
「ちなみにジジは5なのです」
「ぐはっ」
梨花ちゃんがきっちり、とどめを刺してきた。
そして俺の手札は2枚。圭一の手札は一枚。他のみんなは全員あがってしまった。それで今は圭一が引く番だ。
「雄斗、手で隠しても間から見えるぜ！」
「くっ……」
何かで隠すことができたら・・・・・・・・・・・・・いや、隠せるある方法で全てが隠せる！
「これで終わりだ」
圭一が引こうと手を伸ばそうとしたときに俺は手札を机の下に隠して、二枚のトランプを混ぜた。
「雄斗、諦めるんだな。何をしても手札がわかってしまっているんだから」
「雄ちゃん、諦めなよー」
「いや、違う。圭一、魅音」
そして俺はトランプを手で全て覆い隠して圭一の目の前に出した。
「どーちだ？」

俺は笑みを浮かべた。
「なっ」
「「おー」」
「いやー、雄ちゃんがこんな手を使ってくるとはね」
「さぁ、どっちを選ぶ？言っとくがこれはズルじゃないからな。昔にやらなかったか、こんなことするの。えーっと、会則第二条・・・・・・ありとあらゆる努力をすること・・・・・・じゃなかったか」
「・・・・・・やるな、雄斗」
「どうした？手が震えてるぞ」
「う、うるせぇー。俺は・・・・・・左だ」
「・・・・・・本当に左でいいんだな？」
「ああ、それでいい。なぜならお前は確認をしたからだ！右がジョーカーならすぐに左をめくるはずだ」
圭一は左にあるトランプを引いた。そのカードはジョーカーだった。
「ふっ、残念だったな・・・・・・」
「なっ」
「やるねー雄ちゃん」
「面白くなってきましたわ！」
「どちらもファイト、おーです」
「すごいよ、雄斗くん」
周りからは歓声が聞こえてくる。
「まだまだこれからだぜ、雄斗。どーちだっ！」
圭一も同じ戦術できたか……俺は母さんに昔にやられた罠を圭一に仕掛けることにした。
「あれ？圭一、左手に力が入っているな」
そういって圭一の左手に手を置いた。
「なっ、そ、そんなことねーよ」
そのときに、圭一の目が泳いだ。俺はそれを見逃さなかった。
「俺は左を選ぶっ！キングは左手にあるっ！」

俺は圭一から手を離した。圭一が左のトランプをめくった。そのカードはKだった。
「よしっ！」
「ぐおおおおおお！」
圭一が机に倒れた。
「な、なんでわかったんだ？」
圭一が机から起き上がった。
「俺が圭一に『左手に力が入ってるな』と言ったときに圭一の目が泳いだ。だからそのカードがKだと見破ったのさ」
「やるねぇー、雄ちゃん。ちなみに、ポイントは減点制ね。着順がそのままマイナス点。トータルが一番少ない人の優勝！」
俺は5点か。ビリとあまり代わりがない。
でもこのまま負けるわけにはいかない。
「魅音、ちょっとトイレに行ってくる」
「んっ？じゃあ少し休憩ね」
俺は教室から出た。

俺が教室に戻るとゲームが再開された。
「少しみんなにお願いがある」
「どうしたの、雄ちゃん」
「トランプの傷とかがわからない俺に、ハンデとして俺にトランプを切らせることとジジを選ぶ権利が欲しい。あとトランプを配り終わると枚数に誤差が出てくる。この場合だと3人が9枚で、残りの3人は8枚になってしまう。だから順位が低い3名はカードの枚数を8枚にして欲しい」
「べつにおじさんはいいと思うけど、みんなはどう思う？」
「別にそんなことくらいは、いいと思いますわ」
「僕も賛成なのです」

「レナも賛成だよ」
「俺はどっちでもいいぜ」
全員が反対がなかったため、俺の意見が採用された。
「はい、トランプ」
「ありがと」
そういってトランプを受け取った。
そしてトランプを切り始めたときに教室の引き戸が開いた。そこから顔を出したのは知恵先生だった。
「雄斗君、転校の手続きのことなんだけど少しいい？」
「はい」
知恵先生に呼ばれたので、俺はトランプを持って、そのまま教室を出た。
そして用が終わると教室に戻った。
「ごめん、何回もゲームを止めさせて」
「それより早く始めよーぜー」
「わかった」
そしてトランプを切っているとまた教室の引き戸が開いた。
「何回も邪魔してごめんね、雄斗君。これ手続きの書類」
「ありがとうございます」
俺はその受け取った封筒を机の中に入れた。
「まずはジジを抜くぞ」
真ん中のカードをすぐさま抜いて、机の真ん中に置いた。みんなはそのカードをじっと見ていた。
「じゃあ、配るぞ。上位は魅音と沙都子と梨花ちゃんだから9枚ずつ配るぞ」
そして三人に九枚連続でトランプを配り終えた。
「後は俺たちだな」
俺はレナ、圭一、俺の順番に八枚連続でトランプを配った。用意ができたところで全員が手札から揃っているカードを抜き始めた。全員がカード揃える作業を終えたが、雄斗だけは何も捨てていなかっ

た。
「雄ちゃんどうしたの？まさか、一枚も揃ってなかったの」
「をーほっほっほっほ。ざまあないですわね」
俺は笑みを浮かべた。
「ふっ・・・・・・まさか、揃っているカードは・・・・・・」
俺は手札を全て表側に向けた。
「全部だ」
本当に全てが揃っていた。
「なっ」
「「「「えっー」」」」
「あがりだ」
「雄ちゃんどんな手品使ったの？」
「どうしたのかな、かな？」
「どういうことですの」
「みー」
「なぜだー」
みんなが訴えかけてきた。
雄斗は笑みを浮かべていた。

第三話　雄斗の実力（後書き）

どうも、黒狐です。
また後書きを一人ですることにしました。
なっがーい後書きを見たいときは『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～でっ！
今回のは若干短いのかな？
そっちの方が完結しましたら、こっちもなっがーい後書きに変更しますｗｗｗ
次回は雄斗が使ったジジ抜きの必勝法をお教えしますっ！
現実で使えるのか！？
次回お楽しみにっ！！！
では今回はこの辺でっ！

感想待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです！

第四話　罰ゲームは誰の手にっ！？

雄斗はジジ抜きで全ての手札を揃えることに成功。
そして、俺は種明かしをすることにした。
もうこの策は使えないし。
「俺がやったのはいかさまだ。まず俺はさっきの時間にトイレには行かずに職員室に行っていた」
「なっ！雄ちゃん、ま・・・まさか知恵先生を」
「そうだ、そして知恵先生にこう頼んだ。２分後に教室に来て、俺を廊下に呼び出して欲しいと。そして俺はトランプを持って廊下に出た。そこで俺はペアのカードを４組ポケットにしまった。そして教室に戻ってカードを切った。そしてまた知恵先生に俺に封筒を渡すことをお願いした。知恵先生が引き戸を開けたときに俺はみんなの目をだましてポケットからさっきのトランプを山札の下に戻した。そしてみんなにカードを配って残っているのは全てが揃っているカードが俺の手元に来るってわけだ。いかさまをするのは禁止ではないよな？会則第二条。ありとあらゆる努力をすること。違ったか、魅音」
「あっはははは―っ。さすが雄ちゃんだよ。まさか知恵先生を使うなんて。でもまだだよ。勝負はまだ始まったばかりだからね」
「そうですわよ。あとでボコボコにさせて見せますわよ」
「レ、レナも負けないよ！」
「ぼくも負けてられないのですよ」
「うおー、燃えてきたぜ」
みんなに気合を入れてしまったようだ。
次もなんとかしないと・・・・・・。

この試合の結果は二位から沙都子、魅音、圭一、梨花ちゃん、レナだった。
そうして次の試合が始まった。
実は雄斗にはもう一つ策があった。
そして俺は真ん中に集まっているすべてのカードを集めた。
「なぁ、魅音」
「何、雄ちゃん」
「カードの配り方ってどうする？順位が高いほうから配るとか、低いほうから配るとか・・・・・・」
「んー、別にどっちでもいいよ」
「じゃあ、配り方は俺の自由ってことでいいの？」
「いいけど・・・・・・」
「他のみんなもそれでいい？」
反対はなかった。全員が認めてくれた。
そのとき雄斗は笑みを浮かべていた。
「じゃあ、配るぞ」
そしてカードを魅音から配っていった。そして魅音に配る五枚目を俺の前に置いた。その後は普通に配った。でもまた八枚目を俺の前に置いた。
「ゆ、雄ちゃん・・・・・・何しているの？」
「何ってカードを配っているだけだけど・・・・・・」
俺は笑みを浮かべて魅音に言ってやった。これがもう一つの策だ。あらかじめにトランプに印を付けておき、その印のトランプを自分の手札にする。それはもちろん反則なのだ。
「それって反則じゃない？」
「いや、だって全員が配り方は俺の自由だって認めてくれたじゃん」
「「「「「「あっ」」」」」」
「あれっ？おじさん、そんなこと言ったっけな～？」
『カードの配り方ってどうする？順位が高いほうから配るとか、低いほうから配るとか・・・・・・』

『んー、別にどっちでもいいよ』
『じゃあ、配り方は俺の自由ってことでいいの？』
『いいけど・・・・・・』
そんな魅音と雄斗の会話が右手から流れていた。雄斗の手にはボイスレコーダーが握られていた。
「これでも言ってないって主張できるか？」
俺はにやりと笑みを浮かべながら言ってやった。
「「「「・・・・・・・」」」」
そうしてそんな調子で勝ち続けた。もちろん俺の結果は一位だ。

「あはははははっ！！ひぃひぃ・・・・ははははは！！」
魅音が腹を抱えて笑っていた。
その原因は教室にあった。
教室にはメイド姿の圭一がいた。圭一は歯を食いしばっていた。
しかもまわりの反応にもびっくりした。
「圭一君かぁいいいよ〜。おもちかえりぃ〜！！」
「をーほっほっほっほ」
「・・・・・・・・」
もはや何もかもがわからなくなった。
かわいいのか？これがかわいいのか？
「雄斗、そんな哀れな目で見るな」
「・・・・・それで道を歩いてたら捕まるな」
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」
圭一は泣き叫んでしまった。
んっ？捕まる・・・・・・・・・あっ！思い出した。学校が終わったら母さんに紹介してもらった警察の人に合うんだった！
そして俺は急いで教室を出て職員室に行き、学校の電話を借りた。
『はい、興宮署です』

「すみません、そちらに大石さんという方はおりますでしょうか？いらっしゃったらお願いしたいのですが・・・・・・」
『失礼ですが、どちら様でしょうか？』
「御神です」
『少しお待ちください』
電話の向かうから「大石さんー」と呼んでいる声が聞こえた。どうやらいるみたいだ。
『はいもしもし、大石です。御神警視から話は聞いてますよ』
「はじめまして。御神雄斗です。遅くなってしまってすいません」
『いえいえ。じゃあこれから向かいにいきますよ。家のほうで大丈夫ですか』
「ではお願いします」
『わかりました。今から向かいます。では』
そういって電話が切れた。
だいたい30分くらいでくるだろう。なら間に合う。
ガラガラ―――
「雄ちゃん。何してるの？」
「何って電話だけど」
「早く帰ろう」
「わかった。すぐに向かう」
そして帰る用意ができたので下駄箱の方に向かった。
「お、お待たせ・・・・・・」
そこにはまだメイド姿の圭一がいた。
「……」
「……」
「……ぷっ」
思わず笑ってしまった。急にそれを見ると思わず笑ってしまう。
「ゆ、雄斗おおおおおー」
雛見沢分校には圭一の声が響き渡った。

そんなこんなで魅音と圭一とレナで家に帰っていた。沙都子と梨花ちゃんは帰り道が逆なのですぐに別れてしまった。
俺の横にはおかしなメイドさんがいる。
「ほ、本当にそれで帰るんだな・・・・・・」
「ああ、強制だからな」
「・・・・・・・・・ぷっ、くすくすくす」
駄目だ。耐えられない。
「く、くそおおおおお。お前もいつかメイド服を着させてやる！」
「あはははははは。次は雄ちゃんの番だよー」
「雄斗君のメイド姿見てみたい～」
「あはは。やって見れるならやってみろ！」
「強気だね、雄ちゃん」
「勉強と力は弱いけど、こういうことだけは強いからな」
「雄斗っ、絶対罰ゲームを受けさせてやるっ！」
圭一は俺に指を指して宣言してきた。
もちろんメイド姿で……
「ふふっ、あはははははは」
いろんな意味で俺は限界だった。
「もう慣れろよっー！！！」
「「あはははははは」」
そんな会話が続いていた。

第四話　罰ゲームは誰の手にっ！？（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。今週からこのようなラジオ形式で後書きをやっていこうと思います。では『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』でやっていた『トーキングＫＫ』と何が違うのか。『トーキングＫＫ』は圭一と二人でやっていましたが、このラジオでは毎回毎回ゲストを呼んで、番組を進行していきたいと思います。ひぐらしのメンバーでこの色が何も無いラジオに色を付けていこうと思います。

　では今回のゲストをご紹介しましょう。初めてのゲストはこの方ですっ！！！」

圭一「みんな、俺、前原圭一。よろしくー」

黒狐「今回のゲスト、おなじみの前原圭一さんです」

圭一「ついに俺はメインを降ろされたかー」

黒狐「いろいろ考えた結果なんで、そこは謝るしか無いですね」

圭一「まあ、そんな気はしてたけどな」

黒狐「では、今回の話ですが、私が書いている『ＴＲＵＴＨ』のオリジナルゲームを考えているとき、この必勝法が浮かんだ訳です」

圭一「まあ、普段では気軽に使えないな」

黒狐「まあ、そうだな。ひぐらしならではのものと考えてください。超能力的なものは嫌だったんで」

圭一「今後の展開にも期待だな」

黒狐「ぜひお楽しみにっ！！！」

圭一「ここまではなんだか『トーキングＫＫ』と一緒だな」

黒狐「今のところは、全く色がついてないですからね。圭一が来たことに寄って『トーキングＫＫ』色に染まってしまったんじゃない

か？」
圭一「そうだな」
黒狐「この番組は我々だけで色を付けていくのではありません。色を付けるのはこれを見ているあなたもですっ！」
圭一「おおっ！！！」
黒狐「そこでみなさんにどんなことをして欲しいかなどの要望を感想の方にでも書いてください。みなさんでこのラジオに色を付けていきましょうっ！！！」
圭一「また、このラジオに来るのが楽しみになってきたな」
黒狐「企画大好きな黒狐に協力や応援をお願いします」
圭一「最近は小説づくりは順調か？」
黒狐「まずまずですね。最近はアイデアがバンバン出てくるので。最近悩んでることは、バトルスピリッツの新しいパックが出たので、それにたくさんつぎ込んだことかな」
圭一「金の問題かよっ！」
黒狐「あと時間がないことかな」
圭一「もう『トーキングＫＫ』と同じだな」
黒狐「そうだな」
圭一「何か今から新しいこと始める？」
黒狐「黒狐の今週のおすすめっ！」
圭一「だから一緒じゃねーかっ！」
黒狐「圭一の罰ゲーム」
圭一「なぜいきなり罰ゲームしなきゃいけないんだよっ！」
黒狐「黒狐と圭一のバトスピ一本勝負」
圭一「俺、知らねーし」
黒狐「黒狐…」
圭一「考えてんじゃねーよっ！もういいか」
黒狐「いいと思うぜ」
圭一「じゃあ、また今度のお楽しみにするか」
黒狐「ああ、最後にはいつものやつやるぞっ！」

圭一「まあ、ちょっとだし、やろうぜっ！」
黒狐「じゃあ、やります。では今回はこの辺でっ！
これからこのラジオにどんな色がついていくのか？
『ひぐらしの彩るラジオ』のお相手は、黒狐とっ！」
圭一「前原圭一でっ！」
黒狐・圭一「お送りしましたっ！！！」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです。皆様のご協力お願いします。気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます」

今回の黒狐の心の叫びっ！
黒狐「これからどうしよーかーっ！！！！！」
圭一「未定なのかよっ！」

第五話　雛見沢連続怪死事件

「雄斗君の家ってこの近くだったんだね」
「ああ。ここにちょうど空き家があったからな」
魅音と圭一と別れた後、残ったのは俺とレナだけだった。しかも家が近かったのだ。俺の家の三軒隣だった。
「じゃあ、私ここだから。またね、雄斗君」
「おう、また明日」
すると俺の家の前に白い車が止まっていた。
「んっ？」
その車の近くにジャケットを小脇に抱えている小太りの人がいた。
「御神雄斗さんですよね？」
「はい。ということは大石さんですか？」
「ええ。はじめまして、大石です」
「はじめまして、御神雄斗です」
そういって握手をした。
「少し出ましょう。どうぞ、車に乗ってください。私、クーラーがんがんかけちゃいますから冷えすぎたらいってくださいよ」
俺はその車に乗った。
そして大石さんは車を走らせた。
「聞いてますよ。期待の名探偵だって」
「ぼくなんかまだまだですよ」
そして車が動き出した。
「ところで御神さんはどこまでこの事件について知っているんですか？」
俺は自分が雛見沢連続怪死事件の知っている全てを話した。

「大体は合ってます。全ての始まりは１０年前の雛見沢ダム建設計画からです。その計画は国が雛見沢一帯に巨大なダムを建てるという計画があったんですよ。当時では電力の供給と治水が莫大な経済効果を生み出していたので、ダムの建設はラッシュでした。当然反対運動が起こった。裁判にもなったし、議会でも取り上げられました。そのことは知っているでしょう。新聞にも取り上げられましたし」

「昔に聞いたことがあります」

「そして、当時の総理である犬飼総理の息子の犬養毅君が誘拐されました。その後にはさまざまな不祥事が出てきて、ダム計画は中止になりました。そして、その年に一年目の事件が起こりました。そこからはあなたが調べたとおりです・・・・・これは余談なんですが雛見沢には怖い昔話があるんですよ」

「昔話？」

「ええ。雛見沢はね、鬼の住む里と呼ばれていたんです里に下りてきて、人をさらって、食い散らかしてしまうという怖い昔話があるんですよ」

「それが何か関係でも」

「過去の事件はその条件にあってしまうんですよ。一年目の事件では六人の犯人のうち一人は逃走中。こうも考えられるんです」

「神隠しにでもあったと？」

「ええ。その通りです。でもここでは鬼隠しと言われています。話を戻しますが、翌年の事件はダム推進派であった北条夫妻の夫が死んで妻が行方不明。その翌年はここの神主である古手夫妻が亡くなっています。夫は急性心不全で亡くなり、妻は入水自殺です。遺体は見つからず、見つかったのは遺書と沼の前に添えられたぞうりだけです」

「北条と古手というのは・・・・・・古手梨花と北条沙都子の親なんですか？」

「・・・・・・残念ながらそうです」

「そ、そうですか・・・・・・」
「四年目は北条沙都子さんの叔母と呼ばれる人が死んで、北条沙都子さんの兄であった北条悟史さんが行方不明です」
「なっ！」
「四年目は指定捜査指定がかかってるから知らなかったでしょ」
「ええ」
「その全ての事件は一人が死んで一人が行方不明になることです」
「それは祟りのせいだとでも？」
「いいえ。犯罪を起こすのは人間ですよ。連続怪死事件は祟りに見せかけた人間の犯行です」
「・・・・・・その事件の中で何かおかしい点は？」
「まずは二年目から話します。北条夫妻は柵が壊れて崖から落ちたそうです。亡くなられた現場には北条沙都子さんがいたんです。現場といってもその近くの駐車場ですけど」
「何か問題でも？」
「ええ。その駐車場からはその現場が見えなかった。でも彼女は声をかけた作業員に沙都子さんはお父さんとお母さんが崖から落ちたと言ったそうです。そのことを聞いても答えてくれませんでした。覚えてないらしいです」
「・・・・・・・・・」
「四年目ですが・・・・・・その前に北条沙都子さんとその兄は叔母と叔父から暴行を受けていたらしいんです」
「・・・・・・ということは兄が叔母を？」
「はい、私もそう考えていたんですが警察に別件で留置されていた麻薬中毒者が祭り当日の犯行を自供したんですよ。そしてその男は留置所で自殺したんですよ」
「隠蔽工作ですか？」
「たぶんそうでしょう。そのせいで事件は解決してしまって捜査は終了です。最後にそれらの全ての事件は毎年綿流しというお祭りに起きているんですよ」

「・・・・・・綿流しはいつですか？」
「来週の日曜日です」
「・・・・・・・・・・・・」
大石さんがブレーキを踏んだ。あたりは興宮の中だった。ずいぶん遠くまで来てしまった。さらに一時間も経っていた。
「じゃあ、何か飲み物買いに出てきます。御神さんは何がいいですか？」
「じゃあコーヒーで」
「わかりました」
大石さんが車から出た。
俺はしばらくその事件について頭の中で整理をしていた。
すると大石さんが車に戻ってきた。
「どうです。何かわかりましたか？ずっと何かを考えているようにも見えましたが・・・・・・。どうぞコーヒーです」
「ありがとうございます」
そういってコーヒーをもらった。そのコーヒーを一口飲むと俺は口を開いた。
「・・・・・・・・・多分この事件の犯人はオカルト好き。さらにその犯人は大きな組織を持っている。そういうことくらいです」
「ええ、私もそう思っています」
「でもその犯人は途中からじゃないでしょうか」
「どういうことです？」
「この事件の犯人は一年目と二年目に起こったことを利用して三年目、四年目と事件を起こしていってるんじゃないですか」
「私はそうは思いません。私はね、園崎家を筆頭とする御三家を疑っています」
「御三家とは？」
「園崎家、古手家、公由家。それらを御三家といいます」
「園崎家はそんなに大きな組織なんですか？」
「ええ。園崎家が現在雛見沢を支配しているんです。そしてその頂

上にいるのが園崎お魎っていう婆さんです。雛見沢と周辺の町の親族の数千の票を固めて政治家も頭が上がりません」
「そんなに大きかったんですか。じゃあ北条家は園崎家に許してもらえたのですか？」
「いえ、北条家は今、村八分にする大号令をかけられています。つまり除け者にされています」
「なっ！それは沙都子もですか」
「ええ」
「園崎家が犯人だという証拠は何かありますか？」
「いいえ、残念ながらそういったものは掴んでいません。でも諦めませんよ。おやっさんの仇をうってやりますよ！」
大石さんは右手の拳を強く握った。
「すいませんが、おやっさんとは？」
「ああ、すいません。私の親父でもあり、兄貴であり・・・・・・親友のような人です。ですが最初の怪死事件で殺されました」
「そうですか・・・すいません」
「いえいえ、構いませんよ」
「・・・・・大石さんのいうことも一理あると思います。ダム建設を止めさすために犬飼総理大臣の息子をさらい、ダム工事の監督を殺害。そして二年目にダム賛成派であった北条夫婦を殺害する。それを行うことは園崎家には確かに可能だ。でも三年目からは園崎家には何の得もない。ということは途中から犯人が変わっていることになりませんか？四年目は北条悟史さんが沙都子を守るため・・・。では誰が古手夫妻を・・・・・」
すると車が動き出した。
「もうすぐ暗くなるので戻りましょう」
「そうですね。今はこのくらいしかわかりません」
「んっふっふ。さすがに名探偵もお手上げですか？」
「でも必ず犯人を見つけます」
俺は残りのコーヒーを一気に飲んだ。

「心強いです。んっふっふ」
「大石さん……１００％の確証がない限り、犯人を決め付けないほうがいいですよ。後に悔やみきれない後悔しますから」
「・・・・・・・・・・」

第五話　雛見沢連続怪死事件（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。
　ではさっそく、今回のゲストをご紹介しましょう。二回目のゲストはこの方ですっ！！！」
レナ「はうー！竜宮レナだよ！！！」
黒狐「今回のゲスト、竜宮レナさんですっ！レナは別のひぐらしの小説『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』でも出演してましたね」
レナ「あれは面白いけど、ほぼ圭一くんと詩ぃちゃんメインだから」
黒狐「そんなことないと思うよ、結構レナも出てたと思うけど」
レナ「うーん、どうだろう？」
黒狐「詳しくは『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』を見てください。それで、レナはメインかサブかは皆さんが決めてください」
レナ「さりげなく宣伝だね、だね！」
黒狐「そういうことはあまり言わないで欲しいな……」
レナ「それで黒狐さんってさっきパソコンいじりながら何食べてたの？」
黒狐「んっ？さっきは…『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』の最終回を書きながら、ドーナッツ食べてた」
レナ「おいしそうだなー」
黒狐「三つで１００円安物だよ。ただのパンに砂糖まぶしたものだけど」
レナ「表現が酷いかな、かな」

黒狐「食べる？」
レナ「じゃあ、いただきまーす！」
もぐもぐ……
レナ「うん、普通だね。」
黒狐「普通だよ。ちなみにあと一個は明日の朝ご飯」
レナ「なんか悪いことしちゃったかな、かな？」
黒狐「いいよ別に、コーヒーメインだし」
レナ「またクッキー持ってくるね」
黒狐「レナ……ぐすっ……」
レナ「号泣以上の涙が出てるけど……」
黒狐号泣中ｗｗｗ
レナ「そんなことより小説の進み具合はどうなのかな、かな？」
黒狐「ぐすっ、この小説はいい感じかな？でも、オリジナルの方が手こずってる」
レナ「頑張ってね、黒狐さん」
黒狐「よしっ、クッキーのためなら授業中にでも書くか」
レナ「それはよくないかな、かな」
黒狐「でも、基本的には夜だけどな」
レナ「大変だね。今日の昼とか書けなかったの？」
黒狐「ああ、駄目だな。朝はバトスピのショップバトル行ってて、昼から大学。ちなみにバトスピのショップバトルでは優勝してきたぜっ！」
レナ「バトスピって何かな、かな？」
黒狐「カードゲームだよ。俺のお気に入りの。レナの横にあるバックの中にカードが入ってるだろ？」
レナ「見てもいい？」
黒狐「うん」
　ぱかっ
レナ「はうー、おっ持ち帰りいいいっ！！！」
黒狐「な、なぜ暴走っ！？あっ、あれ黄色のデッキだ。わからない

人のために説明します。黄色で気というのは天使や、かあいい動物が書かれているカードが多いのが黄色の特徴です。天使は結構人気ですけどね。正確には天霊ですけど…興味がある人はぜひやってみてください。結構ハマりますよ。バトスピは組み方が違うだけで、バンバン内容が変わってきますから。ブシロードの嫁制、自分のパートナーを決めるやり方とかないので楽しいですよ。ブシロードのTCGもいいけどな」

レナ「はう～、かあいいよー。はうっ！？これもかあいいよ～！！！」

黒狐「なっ！全てのカードをあさってるっ！！！片付けるのが面倒になるな」

レナ「はう～、はう～！！！」

黒狐「おーい、レナ。戻ってこーい」

ひょい

黒狐「うわあああああっ！！！」

スパパパパーンッ

黒狐「ぐっ」

バターンッ

黒狐「うっ、ヤバい、し、しばらく立ち上がれない」

レナ「取り上げるのは良くないと思うな」

黒狐「あとで好きなだけ見せてやるから、今は続けような」

レナ「はうー、じゃああとでいっぱい見せてね！」

黒狐「じゃあ、もうこんなに時間が経ったからまとめといくか」

レナ「うん」

黒狐「圭一のときと全く違う感じになるな。圭一だとバンバン突っ込む感じだけど…」

レナ「次は誰なのかな、かな？」

黒狐「更新するときにクジで決めてる。だからまだ決まってない」

レナ「クジなんだ」

黒狐「本当はレナのコーナーとして、かあいいものを紹介するコー

ナーとかやろうと思ったんだけど」
レナ「何を紹介しようとしたの？」
黒狐「バトスピだよ。レナに見せたデッキが最近強くなったし、黄色デッキでも紹介しようかなーって」
レナ「うっかり、見せちゃったってわけ？」
黒狐「うん」
レナ「次回も楽しみにしてるね」
黒狐「もうすぐ『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』が終わりますので、何を制作するか考えてます。
一つ目はアニメキャラにバトスピをさせる小説
二つ目は学園もののファンタジー小説的なもの
三つ目は『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』の続編かな」
レナ「いろいろ考えてるんだね」
黒狐「少し時間もらってもいいですか」
レナ「いいよ。何するのかな、かな？」
黒狐「今週の土曜日に映画を見になんばに行きました。映画『探偵はＢＡＲにいる』マジでサイコーっ！！！大泉さんはすごいっ！！！今までの探偵というものが変わる」
レナ「そんなに凄いの？」
黒狐「ああ、大人の映画とでも言うべきだな。今まで見てきたものと全然違う。大泉さんの演技もすげぇーっ！！！福山雅治の『ガリレオ』『容疑者Ｘの献身』も凄いけどな」
レナ「すごそうだね。また何かお勧めなものあったらお知えてね」
黒狐「ああ。もう時間なので今回はこの辺でっ！さて、これからこのラジオにどんな色がついていくのか？次回のゲストは誰なのか？
『ひぐらしの彩るラジオ』のお相手は、黒狐とっ！」
レナ「竜宮レナでっ！」
黒狐・レナ「お送りしましたっ！！！」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです。皆様のご協力お願いします。気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます。バトスピ小説をやって欲しいなーって人は感想にやって欲しいーって書いてください。そして、混ぜて欲しいアニメがあれば書いてください。今のところはアイマスかな？遠慮なんてせずにばんばん感想送ってくださいっ！！！！」

今回の黒狐の心の叫びっ！

黒狐「大泉さん、マジですげーっ！！！水曜どうでしょうっ！！！！！」

レナ「凄くハマってるね…」

第六話　調査開始！！！

そして俺の家に着いた。
「ありがとうございました」
「いえ、また何かわかったことがあれば連絡をください。お待ちしておりますよ。んっふっふ」
「最後に一つだけいいですか？」
「ええ、どうぞ」
「園崎家以外に大きな組織がありますか？」
「んー、雛見沢にはそれだけだと思います」
「他には、違うところとつながってるところとかは？」
「さー、わかりません」
「そうですか・・・・・・」
俺はドアを開けた。
「今日はありがとうございました、大石さん。また何かあったらお願いします」
「わかりました。こちらこそよろしくお願いします」
そういうと大石さんは車を走らせた。その車はどんどん離れていった。
そして家に入ろうとした。すると・・・・・・
「雄斗君」
誰かが俺を呼んでいた。
振り向くと後ろにレナが立っていた。
俺は考えだすと周りが見えなくなってしまうのだ。なので、心臓が飛び出す…いや、破裂するような驚きだった。
「ど、どうした？」

「あのね、夕飯を作りすぎちゃっておすそ分けしようかと思ってね。よかったら貰ってくれる？」
「ああ、ありがとう。夕飯はまだだしな」
「そう、よかった。今までどこか行ってたの？」
「あ、ああ、知り合いに合ってたんだ」
「へぇー、知り合いいたんだ」
「ああ」
「じゃあ、これ」
そして、俺はレナから弁当箱を貰った。
かなり大きかった。そのほうがとても助かる。
でも、冷蔵庫の今日で腐る肉をどうしようか……
「まあな。このお礼はまた何かしてやるよ」
とりあえず、気にしないことにする。
「い、いいよ～そんなの」
「じゃあ、またな」
「またねー」
そうして俺は家の中へと入っていった。

「ここが・・・ダム現場か・・・・・・」
俺は次の日、連続怪死事件の現場を見てみることにした。午前中は二年目の白川公園での転落事故現場に行っていた。確かに大石さんの言うとおりであった。
耳にはイヤホンを付けていた。
雄斗は音楽を聴くことが好きだ。いつもウォークマンを持っている。そして、考えるときや、疲れたときにもってこいだ。
やはり沙都子を疑わなければならないのか？でもまだ決まったことじゃない……だめだ・・・何か感情的になっている・・・・・・・・・。

今は連続怪死事件の一年目の事件現場のダム現場に来ている。でもその場所はすっかり変わっており、大きな粗大ゴミの山がたくさんあった。
そして辺りは夕日に包まれてきた。
「・・・・・・・・・」
どうしていいかわからなかった。なぜか雛見沢に来てからわからないことが増えてきたようだ。
大石さんから聞いたことだが、ダム戦争の攻防戦はかなり激しかったらしい。ショベルカーなどのエンジンに砂糖を混ぜたり、大音量でお経を流したり、乱闘が起こったりなどしていたそうだ。少し奥のほうにショベルカーが一台見えた。
とりあえずダム監督がバラバラにされた現場を見てみることにした。でも、そこにたどり着くまでがかなり大変だった。山のように詰まれた粗大ごみの足場はかなり不安定だった。そして、最初の地点に戻ってくるまで一時間以上かかってしまった。
どれだけ広いんだ……
しかも成果は無し。ただ疲れただけで終わってしまった。
「えっと・・・次は・・・・・・・」
俺は手帳を開いた。
その手帳はいつも使っているものであり、事件についていろいろなことが書かれている。もちろん秘密だ。誰にも見せたことは無い。
さて、もう行くか……
「あれ？雄斗君。こんなところでどうしたの？」
レナが現れた。
「うわっ！」
また心臓が破裂しそうになった。
「ほんとだ。雄斗じゃねぇか」
後ろから圭一が現れた。
「圭一も一緒なのか？」
「ああ」

「な、何でこんなところに。ゴミしかないのに・・・・・・」
俺は何かあるのかと思い、周りを見渡した。
「・・・はうっ。ゴミじゃないもん。たっ宝の山なんだよ！だよ！」
レナが急変した。急変といっても怒っているわけではない。なぜなら・・・・・・顔がかなりにやけていたからだ。
甘いものを今から食べるようなかおだ。何ヶ月ぶりに食う顔なんだ？あれは。
「お持ち帰りいいい！！！」
そして、そのままゴミ山のほうへ走っていった。しかもかなり速いスピードで。
俺はただただそれを見るしかなかった。
「雄斗、お前の気持ちはわかるぜ」
ぽんっと圭一が手を肩に乗せてきた。
「ゴミに見えてもレナの中では宝物らしいぜ」
「それはそうとレナって走りが速いのか？」
「ああ、かぁいいモードのレナは超人のような動きをするんだ。もうすぐ部活で嫌でも思い知るかもな」
「ははは・・・・・・」
また謎が増えた。俺は笑うしかなかった。
「しかしここで何してたんだ？」
「ただ雛見沢を観光していただけだ」
「へぇー」
「そんなことよりお前はレナとデートか？」
「ち、ちげーよ。暇だったから宝探しに付き合ってあげただけだ」
俺と圭一はしばらく話し合った。そして日が暮れそうになっていた。レナはずっと宝探しをしていた。
「あれっ、これなんだ？」
そういって圭一は何かを拾った。
「んっ？なんだ手帳か…て、手帳っ！！！」
俺の手にはあるはずのものが無かった。

ポケットにも無い。
「どうしたんだ？」
「いや、あ、あの……うおりゃあああああああっ！！！」
俺は圭一の手に握られている手帳を全力で取り返した。
「な、なんだよいきなりっ！」
圭一は鳩が豆鉄砲を食らったような顔であった。まあ、当然と言えば当然だが…
「こ、これ…俺の手帳なんだ」
「何が書いてあるんだ？」
「まあ、何でもいいじゃないか」
「そうだな……ってよこせぇえええっ！！！」
圭一は素早く俺に飛び込んできた。
「うわあああああああ」
俺は間一髪でよけた。そして距離をとった。
「よこせってなんだよっ！！！」
「何か気になるから」
「秘密だ秘密っ！」
「ぶー、ぶー」
「言ってろっ！！！じゃあ俺は用事があるからもう行くわ」
「おう、また明日」
「ああ」
そうして俺たちは別れた。

第六話　調査開始！！！（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。今回も時間関係なしで喋っていきたいと思います。

　ではさっそく、今回のゲストをご紹介しましょう。三回目のゲストはこの方ですっ！！！」

羽入「あぅあぅあぅ☆羽入なのです」

黒狐「今回のゲストは羽入さんですっ！」

羽入「やっとの登場なのですよ」

黒狐「厳正なクジの結果です」

羽入「ボクは強運の持ち主なのです」

黒狐「ではいつものようにgd gdトークいきましょう」

羽入「もう、最初の時点からgd gdなのです」

黒狐「羽入はこの小説どう思う？」

羽入「つまらないのですよ。ボクが出てないからです」

黒狐「ストレートすぎる」

羽入「それで、ボクはいつ出るのですか？」

黒狐「未定」

羽入「あぅあぅあぅ～、ひどいのですよ、黒狐はひどいのですよ」

黒狐「羽入～、これをみろ」

羽入「あぅ～☆」

黒狐「俺はひどいか？」

羽入「やさしいのです」

黒狐「はい、シュークリーム」

羽入「あぅあぅあぅ～」

黒狐「羽入はシュークリームを幸せそうに食べています。食べ終わるまで一人でトークでもしたいと思います。『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』は最終回をめでたく向かわせていただきましたっ！さらにもうすぐ1万5千アクセス突破っ！！！本当にありがとうございます。そして、この小説の方は今のところは超順調です。約一週間に一回のペースは守っていますｗｗｗ」
羽入「もう、私のコーナーにいってもいいですか？」
黒狐「ああ、目がめっちゃ輝いてる」
羽入「羽入のコーナー『オヤシロさまへのおそなえものっ！！！』
　このコーナーは毎回黒狐さんのおすすめのあま～いデザートを羽入に献上するコーナーなのです☆」
黒狐「ちょーっとまったー！！！」
羽入「あうっ！」
黒狐「ただ、献上するだけでは面白くはない。だから、献上するあま～いものは二つ用意します。ひとつは本当においしいあま～いデザート。もうひとつは、あま～いデザートの中に何かが入ってます」
羽入「あぅあぅあぅ～、余計なお世話なのです」
黒狐「今回、持ってきたあま～いものは、不二家のペコちゃんのほっぺですっ！！！」
羽入「あぅ～！！！」
黒狐「先日、食べる機会があって、食べた時、叫んだほどおいしいかった。クリームはもちろん！外側のスポンジ生地もサイコーにうまいっ！！！王道のスイーツだっ！！！！！」
羽入「あぅ～、もう食べたくてしょうがないのですっ！！！」
黒狐「では、羽入。当たりのペコちゃんのほっぺ、はずれの梨花ちゃん特製の梨花ちゃんのほっぺ。さあ、どっちを選ぶっ！！！」
羽入「あうっ！梨花の陰謀ですかっ！しょうがない、これもあま～いものを食べるひとつの試練。ボクはこっちを選ぶのです」
黒狐「じゃあ、俺は残ったこっちだな。自分も梨花ちゃんのほっぺを食う可能性もあるから怖いよな」

黒狐「ではっ！」
黒狐・羽入「いっただきま～すっ！！！」
ガブッ！！！
黒狐「げほっ！げほっ！マジでやばい。これはだ、げほっ！」
羽入「あぅ～☆とてもおいしいのですよっ！！！あぅあぅあぅ～☆あまい、あまいのでひゅ～！！！」
黒狐「げほっ、げほっ、ガチでやばい。げほっ、ハンパない」
羽入「みなさんもお近くの不二家にお求めにいってみてはどうでしょうか？」
黒狐「はあ、はぁ、げほっ、梨花ちゃんのほっぺ…辛いってレヴェルじゃない…」
羽入「見てて辛そうなのです。文字違いますですよ？」
黒狐「何を入れればこう辛くなるのか？ってか辛さを飛び越して痛すぎる。羽入も食う？」
羽入「断固拒否なのですっ！！！」
黒狐「げほっ、駄目だ、げほっ、まだぁ、げほっ、げほっ、うぎゃあああああああああああ」
羽入「梨花のほっぺ恐るべしっ！！！黒狐さんがダウンしたので、今回はこの辺でっ！！！えーっと、これからこのラジオにどんな色がついていくのか？次回のゲストは誰なのか？
『ひぐらしの彩るラジオ』のお相手は、羽入とっ！」
黒狐「くろぎぃ、げほっ……」
羽入「黒狐さんでお送りしました☆
感想など待ってるのです！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいのです。皆様のご協力お願いしますのです。軽い気持ちで感想など書いてくださいなのです☆黒狐さんはツイッターもやってるので、そちらのほうもチェックなのですっ！！！」

今回の黒狐の心の叫びっ！
黒狐「げほっ…がんぞうや、おだより、げほっ、げほっ」

羽入「このコーナや、本編の感想が欲しいそうなのです☆協力おねがいするのです☆」

第七話　ゲーム大会！

次の日、俺は興宮に来ていた。その理由は雛見沢連続怪死事件の調査ではない。今、俺がいるところは小さなおもちゃ屋だった。

どうやらそこでゲーム大会があると魅音から聞いたのだ。聞いたといっても昨日の夜だ。いきなりすぎるだろと言ったが、ごめんごめんで片付けられてしまった。そして場所と集合場所だけ言われてすぐに電話を切りやがった。予定がなかったからよかった。でもまた調査しようかと思っていたがその予定はパーになってしまった。

最近、ってか最初から流されることが多いな……

そして、自転車で興宮に来たのだ。そこで魅音達と合流した。

「さぁ、入った入った」

そういって魅音が店の中へと入っていった。

でも中はかなり混雑していた。小さい子や同年代のような人もいた。その中には俺たちと同じクラスの人も混じっていた。

「まさかこれって部活会場なのか？」

圭一が魅音に言った。

「驚いたかい？私、この店のおじさんと仲良しでね。たまに客寄せイベントでゲーム大会させてもらってるんだよ。なんと今日の優勝賞金は５万円！！！」

「「５万っ！」」

俺と圭一は声をそろえて驚いてしまった。

俺はてっきり図書カードとかそんなものだとと思っていた。ってか５万ってやり過ぎじゃねえか？

「言っとくけど優勝は譲らないよ！」

そういって俺と圭一の方を叩いた。

「雄ちゃんにはこの前の借りをかえさせて貰うよ！」
そして、魅音は店のどこかに消えていった。
「５万円なんてよく出すな。この店」
すると沙都子が横から言ってきた。
「知らないんですの？優勝賞金の５万円は魅音さんの自腹でしてよ」
「「なっ！」」
また圭一と声をそろえてしまった。
「勝つつもり満々だな」
横を見ると圭一が笑みを浮かべていた。
そして魅音による大会のルール説明が始まった。
「参加者は１８人。これをくじ引きで六卓に分けて、それぞれの卓から一人勝者を出す。それぞれの勝者はトーナメント式で決勝にコマを進めていく。各宅の競技方法はマスターに決めてもらう。いいね？」
「じゃあ、みんなくじを引いてー」
それから全員がくじ引きに動き出した。
「当然分かってると思うけど、部活メンバーには罰ゲームが付くからねー。じゃあがんばってー」
そして全員がくじ引きを引き終わった。結果はなんと部活メンバーがきれいに６つに分かれたのだ。
魅音、なにかしたな。
俺はそう確信した。

「じゃあこのテーブルはこのゲームにしよう！ＵＮＯ」
この店のマスターがＵＮＯというカードゲームを持ってきた。
久しぶりだなー。小学校以来じゃないか。このゲームならいける！
なぜなら俺には相手の行動を読むことができる。人は嘘をつくと目を泳がせたり、瞬きの回数が速くなったりする。いつも犯人を追

い詰めたり、探し出すときなどに使っている。
そして勝負は最終局面に入っていた。他の卓を見ると一つ終わっているところがあった。そしてその卓の近くには飲み物を飲んでいる魅音の姿があった。その顔は勝ち誇っているような顔だった。
やはり魅音か・・・・・・。
「ウノ！！！」
その男の子は赤の1カードを出した。
俺の順番の次の人が手札が一枚になってしまったのだ。そして俺の番が回ってきた。手札は俺が2枚、他の人は1枚と4枚だ。
「ふっ、その様子だと最後のカードは赤だな」
「えっ！」
「残念だが俺は青の1をだす。そしてウノ！」
そして青のまま俺のターンが回ってきた。
「俺の最後の手札は青だ。これで勝ちだ」
俺は手札が0枚になった。俺の勝ちが確定した。
そして魅音に近づいていった。
「さすがだな、わが部長は」
「ふふふ、この部長をなめてもらっては困るね。次はこの前みたいにはいかないよ」
「ああ、もちろんだ。本気を見せてやるよ」
「望むところだよ！」
俺は周りを見渡した。
「しかしこうやって見ると各卓はすごいな」
「さすが部活メンバーって感じだよ」
レナのやっているゲームはかるた。凄いところはマッハの速さで札を取っていく。かるたの絵はかわいいのばっかりだし。それは他の人には勝ち目がないはずだ。もう勝負が確定したものだ。
沙都子のやっているゲームはトランプを神経衰弱だ。凄いところは人が見てないところでトランプをすり替えていることだ。そんなこともしてもよかったのかはわからないが・・・・・。

梨花ちゃんはどこよりも凄かった。ちなみに梨花ちゃんがやっているのは魚釣りゲームだ。
「わー、釣れましたのです」
梨花ちゃんが一匹魚を釣ると・・・・・・。
「梨花ちゃんうまいうま～いっ」
「梨花ちゃんの圧勝だよ～。すご～い！」
「わーいですー」
「・・・・・・・・・」
なんだこれは！？
梨花ちゃんは相手の戦力を全て奪ってしまったのだ。しかも相手は手に釣竿を持っていない。俺は唖然として見ていた。はっきりいってこんな勝負は見たことない。
「問題は・・・・・・圭一だな」
圭一のゲームは百万長者ゲーム。ルーレットを回すだけの運のゲームだ。俺は人生ゲームしかやったことはないがルールは一緒だろう。
卓を見ると圭一のお金は他の人よりも明らかに少なかった。他の人は確か同じ学校の下級生だった。
「そうだね・・・・・・それじゃっ、励ましてきましょうかね」
そういって圭一の卓に魅音は向かっていった。
そこでは何か言い争いのようなものが数十秒あった。言い争いといっても魅音が一方的にしゃべっているだかだが。
すると魅音が去ると圭一はゲームを対戦している人と話し合いになった。
「何を言ったの？」
俺は戻ってきた魅音に聞いた。
「んっ？本気を出せって言っただけ」
んっ、本気を出す？
そして数十秒後経った。
「「「ゲーム終了――！！！」」」

「俺の完全勝利だ」
圭一が勝利したのだった。
ははは・・・これはゲーム関係ねぇーな。
多分圭一は他のプレーヤーを説得したのだろう。どうやったかは知らないが・・・・・・。その卓の百万長者ゲームを見てみると、ゴールのマスに誰の駒も置かれていなかった。
こうして部活メンバーが全員勝ち抜いたのだった。
「よぉぉし！！魅音！次は直接勝負だ！！！」
圭一がかなり燃えていた。だが・・・・・・
「ごめん、圭ちゃん。私、これからバイトー☆」
「何ー！」
圭一はすっ転んだ。
「せっかく熱くなってきたのについてないよ。叔父さんの店のレジが足りないって電話あってさ」
「そっか。バイトじゃしょうがねーな」
そして圭一と魅音は熱く語り始めていた。
「みんな今日はありがとう。おかげでイベントが大盛り上がりだったよ」
この店のマスターが部活メンバーに言ってきた。手にはなにやら紙袋が数個握られていた。それを俺たちに差し出した。
「これ今日のお駄賃に」
「「「わーっ」」」
魅音以外の全員が貰った。
「私にはないのー？善郎おじさん」
「親戚にはナシ！」
魅音は頬を膨らましていた。
レナと沙都子と梨花ちゃんが貰った袋の中身はかわいいぬいぐるみだった。
「じゃあ、俺たちのって・・・・・・」
「た、多分・・・・・・」

二人が中身を出すと予想通り女の子向けのものだった。俺と圭一はかわいい人形が入っていた。
「やはり・・・・・・」
「予想はついていたがな」
「あははは っ。ふたりともには似合わないのが出てきちゃったねー」
「かわいいのは認めるんだが・・・・・・」
「これが家にあるのって見られたくないな。絶対誤解されるな」
「ああ、そうだな・・・・・・」
俺は魅音が一瞬欲しそうな顔をしたような気がした。なぜかそんな気がした。
「レナ、これ前のおすそ分けのお返しとしてやるよ」
俺はレナにその人形を渡した。
「くれるのっ！レナに！」
「ああ、お返しするのは当たり前だからな。じゃあ…圭一もお返しすべきだよな」
ニヤニヤしながら圭一に言ってやった。
「えっ！何のことだよ！」
「自分で考えろ。今日のことをな！」
「た、たくっ」
圭一は魅音の向かっていった。
「・・・・・・ほれっ」
圭一は魅音に人形を渡した。
「えっ、ど・・・どうしてわたっ私なのさ！お、おじさんにはこんな女の子っぽいのに合わないよっ！」
魅音は顔が真っ赤になり、あたふたしていた。
俺は笑みを浮かべた。
「魅音、さっきからその人形がほしいって顔に書いてあるぜ、魅音」
「書いてない！書いてない！」
よりあたふたしだした。
「おいおい。別に女の子じゃないと人形は渡せないとかいう考え方

じゃねぇぞ」
「そ、そうなの？・・・じゃあ女の子じゃなくても受け取ってもいいんだ・・・？」
横で俺やレナや沙都子が笑い出した。そのせいで魅音はさらに真っ赤になってしまった。
「男が仲間に贈ったもんだぜ。大事にしなかったら承知しないぞ！」
「う・・・・・・うん・・・・・・。言っとくけどこれは圭ちゃんの顔を立てるために仕方なく受け取るんだけだからね！？」
「へぇー仕方なくねぇー」
「そ、そうだよ！」
それから圭一と魅音のそういう会話が続いた。
「じゃあバイトに遅れるからもう行くよ！」
そういって魅音は走り出していった。
「あはははは、圭一君、百点満点かな、かな！」
「魅音さんて意地っ張りですものね。欲しいってあんなに顔に書いてありますのに」
「ぼくもそう思いますのです」
「よく渡せたな圭一。面白かったぞ」
「違いねぇーな！あはははははは！」
「ちょっ、こらぁー。おじさんの陰口言ってるでしょ！」
魅音が遠くから言ってきた。
「バイト急がねぇーとやばいんじゃねぇーの」
「もー！覚えておきなよー！」
圭一がそう言うと魅音は走り去ってしまった。顔を真っ赤にしながら。
俺は圭一に小声でそう言ってやった。
「・・・・・・圭一、お前も魅音にどうやってあげようか迷ってたんじゃねぇーの？顔見てたらわかるぞ」
すると圭一は真っ赤になってしまった。
相変わらず俺はニヤニヤしている。

「どうしたのかな、かな？」
レナが俺と圭一の会話に入ってきた。
「な、なんでもねぇーよ！」
そのとき、俺のいたずら心に火がついた。
「そうか？実はな、圭一は―――」
「雄斗ぉーーー」
圭一が飛び掛ってきた。
「うわっ！」
不意打ちを食らってしまった。圭一は腕で俺の首を腕で絞めてきた。
「ちょっ、ギブギブっ！い、言わないから離せー、死ぬ、死ぬって！！！」
「「「あはははは」」」
そんな会話がしばらく続いていた。

第七話　ゲーム大会！（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。今回も時間関係なしで喋っていきたいと思います。

　ではさっそく、今回のゲストをご紹介しましょう。今回のゲストはこの方だっ！！！」

沙都子「北条沙都子ですわ」

黒狐「今回のゲストは北条沙都子さんですっ！」

沙都子「やっとわたくしの出番でしてよ」

黒狐「いつも、ラジオの前にサイコロで決めるから全部運だよ。ネタを考えるのは大変だけどな」

沙都子「そういうことは言わないほうがいいのですわよ」

黒狐「大丈夫大丈夫っ！」

沙都子「それにしましても、今回の話はだいぶ原作よりの話ですわね」

黒狐「ああ、一応行っておくが、ちゃんと原作の日付などを考えながらスケジュール立ててるから、この回はゲーム大会ということになったんだ。まあ、これからが黒狐オリジナルにしようとしてる」

沙都子「それならいいのですけど、私の出番とかは大丈夫ですの？」

黒狐「…ダイジョウブデスヨー」

沙都子「……」

黒狐「何だ？その手に握ってる紐は」

沙都子「えいっ！」

ガンッ！！！

黒狐「ぐふっ！！！」

沙都子「トラップですわっ！」
黒狐「これガチの盥だ…いつの間に用意したんだ」
沙都子「ついさっきですわ」
黒狐「ははは…でも、前に沙都子のトラップの回作っただろ！」
沙都子「それはひぐらしの小説では必ず必要なものですわ」
黒狐「どんなチートキャラでも沙都子のトラップは通用しねーだろ？」
沙都子「当たり前ですわ」
黒狐「ちなみに、さっきの盥で頭が痛いのだが」
沙都子「当たるのがいけないんですわ」
黒狐「最近、俺の役目って酷い気がしてきた。梨花ちゃんのほっぺを二回食べてるんだよ」
沙都子「実は今日も…」
黒狐「ぜってー食べねーぞっ！！！」
沙都子「冗談ですわ。それより、私のコーナーとか考えてますの？」
黒狐「考えてないっ！」
沙都子「威張るんじゃないですのっ！！！」
ガンッ
黒狐「ぐっ！！！」
沙都子「どうです！二回目の盥トラップは！？」
黒狐「いてて…だからいつ仕掛けたんだよっ！」
沙都子「企業秘密ですわ！！！」
黒狐「なんかもう十分沙都子のすごさが伝わった気がするんだけどっ！！！」
沙都子「トラップに関してはわたくしにおまかせですわよっ！」
黒狐「花火トラップとか止めろよ。部屋が引火するから」
沙都子「そのくらいは当たり前でございましてよっ！」
黒狐「沙都子限定のコーナーが浮かんでこないので、募集します」
沙都子「他力本願の極みですの」
黒狐「やって欲しいコーナーとかでも送ってくださいっ！！！」

沙都子「私のコーナーがいつになるかが疑問ですの」
黒狐「浮かんだら部活メンバーの誰かと競演させてやるから今回はトークだけということでっ！！！」
沙都子「しょうがないですわね」
黒狐「ただいま１２時を回りました」
沙都子「どこのラジオですのっ！！！」
黒狐「沙都子って圭一並みのつっこみ力があるな」
沙都子「当たり前でしてよ」
黒狐「盥が落ちてくるのは嫌だけどな」
沙都子「度が過ぎたら、トラップを発動しますの」
黒狐「圭一より恐ろしいっ！！！」
沙都子「そんなことより、今後の予定とかどうなったんですの？」
黒狐「とりあえず、今はオリジナルを作成中。ツイッターとかでもつぶやいていたけど、サブキャラの名前で悩んでる」
沙都子「ひぐらしは？」
黒狐「ザ・クイズショウの続編も考えてる」
沙都子「また暇ができますの」
黒狐「今度は沙都子を結構出そうかと考え中！」
沙都子「本当ですの！？」
黒狐「未定だけどな」
沙都子「どっちですのっ！！！」
バシュっ！！！
黒狐「うわあああああ」
沙都子「では、黒狐さんがなぜか網で捕まっていますが、時間も時間ですので、今回はここまでっ！！！」
黒狐「最近扱いが酷い黒狐と」
沙都子「北条沙都子で」
黒狐・沙都子「お送りしましたっ！！！」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれ

れば嬉しいです。皆様のご協力お願いします。気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます」
沙都子「部活メンバーのコーナーも募集してるそうなのでそちらもよろしくですわっ！」

今回の黒狐の心の叫びっ！
黒狐「『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』が一日で１，１５６アクセスというビックリするような結果がでました。これからも頑張っていくのでよろしくっ！！！そして、応援ありがとうっ！！！」
沙都子「長過ぎですのっ！」
ボトッ！
黒狐「俺を落とすなーっ！！！」
ドンッ
黒狐「隣の人から苦情くるな。ははは・・・」
沙都子「ではまた次回ですの」

第八話　雄斗とエンジェルモート

そして次の日、放課後の部活は梨花ちゃんの不参加で中止となった。魅音から聞いたが綿流しのお祭りに梨花ちゃんは演舞をするらしい。その演舞は餅つきの杵くらい重い祭事用の神聖な鍬を持って演舞をするらしい。その演舞は布団を鍬で切り開いてその中から綿を取る作業らしい。それを昨年もやっているらしい。

そのために一週間前から練習をするので不参加。魅音も何か用事があるといっていた。

だから一週間は部活がなしになった。

やっと事件に集中できる。

そう思って家に帰り大石さんに連絡を入れてまたドライブをすることになった。

そして今、玄関で大石さんを待っていた。

すると向こうから車がやってきた。そこには大石さんが乗っていた。俺の家の前に止まると俺は助手席に乗り込んだ。そしていつも通り興宮へと向かって走り出した。

「どうです、何かわかりました？」

「全然です。今日からやっと取り組めそうです」

「そうですか」

「犯人はまだ誰かはわかりません。でも俺はこの事件の犯人は毎年バラバラじゃないかと考えています。一年目は捕まっていますが工事現場の作業員。二年目と三年目は大掛かりな組織。四年目は北条悟史さん。でも不思議なことは、一年目はダム工事の監督の右手を所持している作業員の男性が行方不明になったこと。二年目は留置所に入っていた麻薬中毒の男性が犯人を名乗り出たすぐに死んでい

ること。三年目は古手夫妻の夫の急な急性心不全。そして妻の入水自殺。四年目は北条悟史さんの失踪。そこがこの事件を解く鍵だと思っています」
「雄斗さん、三年目の古手夫妻の妻の入水自殺は何が不思議なんですか？」
「それは水死を自らで行うのが難しいからです。そんなにすぐに簡単に出来るものじゃない」
「確かにそうですね・・・・・そう考えてみると確かにおかしい気がしてきます。ではなぜ二年目が大掛かりな組織の犯行だと？」
「沙都子が犯人だと考えるのは間違ってないと思います。でも留置所に入っていた麻薬中毒の男性が犯人を名乗り出て、すぐに死んでしまったということが、おかしくなってきます。そんな男と沙都子は、協力ができるはずかない。考えるなら沙都子の目の前で誰かが北条夫妻を突き落とす。そして気を失った沙都子を誰かが車に運んだ。これなら辻褄が合います。あくまでも仮説ですが・・・・・」
「へぇー、さすがですねぇー。私には考えつきませんよ。んっふっふ」
「でも問題がたくさんあります。なぜ犯人は沙都子を殺さなかったのか？それと柵を壊す必要があったのか？謎だらけです。」
「そうですねぇー、沙都子さんが両親を押してもそんなに押し飛ばせない。さらに柵を壊すことなんて無理かもしれませんね」
「・・・・・大石さんはこの事件をどう考えますか？偶然に日が重なった事件、組織的犯行の事件」
「私は前にも言いましたが園崎家が怪しいと考えていますよ。全て園崎家に関係することばかりです」
「じゃあ、次は大石さんの成果を教えてもらいましょうか」
「ええ、でも」
キッ――――
大石さんは駐車場に車を止めた。
「ここで話しましょう」

そこはファミレスの様なところだった。名前はＡｎｇｅｌ　Ｍｏｒｔ。そう看板に書かれてあった。ものすっごく可愛いロゴで。
大石さんに誘導されながら俺は店内に入っていった。
カランカラン―――
「いらっしゃいませ！エンジェルモートへようこそ！」
その店内にはきわどいような衣装を着たウェイトレスの姿があった。
「なっ！」
「んっふっふ！ウェイトレスさんの格好、かわいらしいでしょう？」
ははは・・・・・・
こんなところがあるとは夢にも思っていなかった。
そして席へと案内された。大石さんはコーヒー。俺はここの日替わりセットを注文した。
「じゃあ本題に入りましょうか」
「ええ、どうぞ」
そう言いつつ俺はテーブルに置かれているケーキを食べ始めた。
口を開く前に大石さんの顔が真剣になった。
「去年に悟史くんが失踪したときに、悟史さんのお友達グループであった皆さんをちょっぴりだけ調べさせて貰ったんです・・・・・・今からとてもつまらない話になりますので御神さんがつまらないと感じたらいつでもおっしゃってください。すぐに終わりにしますので」
「はい」
「この事件にあなたのお友達グループにつながっているのです」
「そうかもしれませんね。ダム戦争のときは園崎家つながりで魅音が関係する。そして三年目は古手梨花。そして二年目と四年目は沙都子。ではレナは？」
「そうです。関係ないかと思ってたんですが、ちょっと気になることがありましてね。竜宮さんは・・・・・・雛見沢に引っ越してくる前の学校で校舎のガラスを割って回り、謹慎処分を受けているん

ですよ」
「なっ！」
「その後、神経科に通院し、何週間、投薬と医師のカウンセリングを受けていました・・・・・・家運手リングをした医師のカルテにレナさんの会話の内容が記載されているんですがね。その中にオヤシロさまって単語が出てくるんですよ。なんでもオヤシロさまっていう幽霊みたいなものがですね、夜な夜な自宅にやってきて枕元に立って見下ろすんだそうですよ。そして竜宮さんは小学校にあがるまでは雛見沢に住んでいたんですよ」
「大石さん、つまらないです。レナ達の過去に何があったのか知りませんけど、事件には何のかかわりもない。これでは俺の友達は関係ないことになりますよ。レナは何の事件にも関係がない。そうじゃないですか」
「・・・・・・なっはっはっは。こんなに否定されると思っていませんでしたよー」
「他には何かありますか？」
「いえ、もうこれだけです」
「・・・・・・・・・そうですか。この事件は今までで一番難しい。この事件には証拠と呼ばれるものが全くない。そして容疑者が多すぎる。いや、ほとんど絞れない」
「御神さんは誰か疑ってますか？」
「今の段階では園崎家ですかね。でも雛見沢に大きな組織があれば話は変わってきますが・・・・・・・」
「大きな組織ですか・・・・・・」
「どう考えても園崎家が犯人だと思えないんです」
俺はこの店のメニューを取った。
「すいませーん」
俺は手を上げながら近くのウェイトレスに声をかけた。
「これとこれとこれ。あとホットコーヒー」
「はい、承知いたしましたご主人様」

そういってウェイトレスは厨房に向かっていった。
俺が頼んだのは甘い甘いデザートだ。実を言うと俺は甘い菓子がとても好きなのだ。家には必ずチョコや飴やクッキーなどの菓子が必ず置いてある。すぐに無くなるけど。
一応言っておくがさっきの注文したセットにデザートは付いていた。
実をいうと、俺はここのデザートの味にはまってしまったのだった。
「よく食べますね～。んっふっふ」
「実は甘いものには目がなくて・・・あはははっ」
「じゃあ今日はここまでにしましょう」
「はい」
そして大石さんはホットコーヒーを飲み干した。
俺はメニューを片っ端から見ていた。
「御神さん、私、少しトイレに行ってきますので・・・」
「ええ」
俺は再びメニューを見始めた。
「お待たせいたしました」
そしてテーブルの上に頼んだデザートをウェイトレスが並べていた。そのときに俺は気づいてしまった。
「・・・・・・魅音？」
「えっ？」
「魅音・・・だよな？」
確かバイトだっていってたな……なにしてるんだ、魅音。全然がらじゃない。想像もつかない。
「・・・・・・・・・あはははは。私、魅音の妹の詩音です」
「・・・んっ？詩・・・音・・・・・・？」
「私、園崎詩音です」
双子でもそっくりすぎるだろ。でも何か魅音じゃないような感じがする。演技には思えないし・・・・・・。嘘をついているような素振りもなかった。初めてそっくりな双子に合った。

「そ、そうなのか・・・間違って悪かった。俺は御神雄斗。よろしく」
「こちらこそよろしく☆それにしてもよく食べますね」
詩音は机のデザートを見て言った。
「好きだからな。こう見えて甘いものには目が無いほうなんだ。もっと食べたいが・・・金がな。ははは」
「あはははは」
「おやぁ～？これはこれは園崎詩音さんではないですか～。んっふっふ」
「これはこれは大石のおじさん。どうしたんですかこんなところで？」
「ただ御神さんと話しているだけですよ～」
なにかここにいることが気まずくなってしまった。
「あっ、私そろそろ仕事に戻らなきゃ！じゃあね、雄ちゃん☆」
そういって詩音は厨房のほうへと消えていった。
まさか雄ちゃんと呼ばれるとは思ってもいなかったので、急に恥ずかしくなってしまった。
きっと魅音に聞いたんだな。
そして机にあるデザートの最後のひとかけらを口に入れた。そしてそのあと残りのホットコーヒーを一気に飲んだ。

第八話　雄斗とエンジェルモート（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、今回も始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。今回もグダグダトークもしたいと思います。

　ではさっそく、今回のゲストをご紹介しましょう。今回のゲストはこの方っ！！！」

魅音「みんな～元気？園崎魅音だよ！」

黒狐「今回のゲストは園崎魅音ですっ！！！」

魅音「今回は詩音の出番なのに…」

黒狐「サイコロ任せだからな」

魅音「また憎まれるよ」

黒狐「もう憎ませてるよ。おみやげとかいっても梨花ちゃんのほっぺは食べないからなっ！！！」

魅音「あれは辛そうだったね。今度罰ゲームで使ってみようかな？」

黒狐「止めた方がいいよ、死人が出るよ」

魅音「それはそうとツイッターでオリジナル小説制作開始って書いてたけど」

黒狐「ああ、前からつぶやいてたけど、やっと名前が決まったからな。あと二週間くらいに出そうかな？って思ってる」

魅音「いろいろと大変だね」

黒狐「そして、最初のオリジナル小説『ＴＲＵＴＨ』の方が第一章として終了します。週一は難しかった」

魅音「三つ一緒はキツかったかな」

黒狐「まあな、だから第二章にするんだ」

魅音「なんか疲れてるみたいだね。小説でも書きすぎたの？」

黒狐「実は2連続で深夜カラオケ行ってるんだよ」
魅音「にっ、2連続ーっ！！！」
黒狐「『水曜どうでしょう』の深夜バスよりもきついかなｗｗｗ」
魅音「今日は遅刻？」
黒狐「全然！余裕だね」
魅音「頑張ってるね」
黒狐「今週はいろいろありすぎてるけどね」
魅音「それで何か面白い企画とかないの？」
黒狐「企画か～。最近、考えてないからなー。いつも、このラジオをやる前にサイコロで決めてるからな。でも一個あるな」
魅音「なになに？」
黒狐「黒狐のおすすめ！！！」
魅音「どっかで聞いたような・・・」
黒狐「ああ、そりゃそうだろうなそれは『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』の後書きで『トーキングＫＫ』でやってた企画のリメイクだからな」
魅音「リメイクじゃなくまんまでしょ」
黒狐「ああ」
魅音「他に何か無かったの」
黒狐「４こ浮かんだけどこれかなって」
魅音「まあ、これはこれでおもしろいから別にいいけど」
黒狐「このコーナーでは、私のおすすめのアニメや漫画や小説、出来事などなど皆さんに紹介しようというコーナーです！！！」
魅音「まんまだ」
黒狐「では、今回のおすすめはっ！『カイジ２』ですっ！」
魅音「おおー、ってことは映画行ったんだ」
黒狐「新人歓迎会の前にな。さて、この映画はアニメや漫画でおなじみのカイジの実写版です。藤原竜也さんがいい演技してます。そして、魅音が好きそうなオリジナルゲームまで出てきますっ！」
魅音「へー、カイジなら読んだことあるよ。あれ面白いよね」

黒狐「そして、今回のメインは一玉４０００円のパチンコ『沼』ですが、原作とストーリーが違うため、めっちゃおもしろいです。利根川が復活するということが魅力ですっ！香川照之さん、さすがです！」
魅音「確か、原作に無いゲームも出てくるんだっけ？」
黒狐「ああ、それもまた面白いっ！是非見に行ってはどうでしょうか？ちなみにそういうオリジナル小説作ってるので、僕のやつもみてくださいっ！！！」
魅音「結構長くなったね？」
黒狐「そうだな。じゃあ、今回はここら辺にするかっ！」
魅音「そうだね」
黒狐「今回のパーソナリティーは、疲れ果てた黒狐とっ！」
魅音「園崎魅音でっ！」
黒狐・魅音「「お送りしましたっ！！！」」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです。皆様のご協力お願いします。気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます」
魅音「このラジオでやって欲しいことなども送ってねっ！！！おじさんも楽しい方がいいしねっ！！！」

今回の黒狐の心の叫びっ！
黒狐「オリジナル小説がんばるぞーっ！」
魅音「こっちも頑張ってよっ！」

第九話　魅音の思い

ピンポーン――――
雄斗の家のチャイムが鳴った。
「すぐ行くー」
俺は玄関に向かって叫んでから、机においてある弁当をかばんに入れた。その弁当はいつもより早く起きて作ったものだ。眠気を我慢しながら作ったものだ。そのかばんを持って玄関に向かった。
そしてドアを開けるとそこにはレナが立っていた。
「おはよー、雄斗君」
「ああ、おはよ。レナ」
そして、二人で学校に向かって歩き出した。
それからいつもの待ち合わせをしている場所で圭一と魅音と合流した。
俺たちは学校に着いた。
学校の廊下を歩いていると魅音が教室の前で立ち止まりにやりを笑みを浮かべてこっちを向いてきた。
「んっ？」
「圭ちゃんどーぞ」
そう言って後ろに下がった。
「今日こそは攻略してやるぜっ！」
圭一はドアに向かって叫びだした。
なにが始まるんだ？
「私の手のひらで踊りなさいですわ」
すると、すぐにドアから返事が返ってきた。その声はどう聞いても自信満々の沙都子の声だった。

朝っぱらから何する気だ……
ドアをよく見ると俺が転向してきたときみたいに黒板消しがドアに挟まっていた。
そして、圭一もそれに気づいたようだ。
「黒板消しはフェイクだ・・・・・・ってことはおそらく引き戸への誘導！・・・・・・引き戸にこんなに画鋲がっ！」
圭一の言うとおり引き戸にたくさんの画鋲がセロハンテープで付けてあった。
他の人が開けた場合大丈夫なのだろうか……
「ふっ、残念だったな沙都子・・・罠は全て見切った！！トラップ解除っ！」
そういって圭一はドアを豪快に開けた。すると、予想通りトラップが起動して、黒板消しが落下する。
しかしその黒板消しは何に当たることもなく床にぶつかった。
黒板消しからはチョークの粉が小さく舞った。
「沙都子の勝ちだな」
俺はボソッとつぶやいた。
中に入ろうとした圭一の足に、下のほうにピンッと張ってあるロープにつまずいてしまった。そして、圭一が倒れるその先には墨がこぼれるくらいなみなみと入ったすずりが置いてあった。
「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！」
圭一は体をねじってぎりぎりすずりの横に倒れた。
「おはようございますわ。朝からにぎやかですわねー！をーほっほっほっほ」
沙都子は圭一を見下ろすように見て高らかに笑っていた。
「おはようございますです」
沙都子の後ろから梨花ちゃんがぴょこっとできた。
「残念だな圭一。死角になるところに注目しないと」
俺はアドバイスを言った。
しかし、これからこんな展開になるとは今の俺には思いもしなか

った。
「くそっ、明日は雄斗がやってみろよ」
「えっ、なんで俺がっ！」
「それいいかもね！」
魅音が教室に入ってきた。
「いいかもねじゃねーぇ！」
「それでは明日はスペシャルなものを用意しなければなりませんわね」
「がんばりなよ、雄ちゃんっ！」
「・・・・・・はははは」
決まってしまったようだ。朝っぱらからこんなことするのか……
これからは軽率な発言を控えなければならないな……
今頃、そう悟ったのだった。

それから放課後になって、いつも通りの帰り道を圭一と魅音とレナと一緒に帰っていた。
カナカナカナカナカナカナ――――
辺りはひぐらしの鳴き声でいっぱいだった。
それが雛見沢のいいところでもある。
そして、今は魅音が別れるところらへんにいた。
「あ、あのさ、雄ちゃん。この前に漫画貸すって言ってたじゃん。よかったら寄ってく？」
「・・・・・・ああ、そうだな。すっかり忘れてた」
魅音にそんなこと言われたことがなかった。でも何か言いたそうだったのであえてのることにした。みんなにはいえないことなのだろう。
そして圭一とレナと別れて、魅音と一緒に魅音の家に向かって歩いた。すると魅音が急に止まった。

「あの・・・雄ちゃん」
「なんだ、何か言いたいことがあるからあんな嘘をついたんじゃないのか？」
「オヤシロ様の祟りのこと・・・・・・知ってたの？」
「・・・・・・ああ」
「それを調べにきたの？」
「・・・・・・・・・・ああ、その通りだ。きっと詩音からの情報だろ？」
「・・・・・・うん」
魅音は少し俯いた。
「俺の両親は警察官だ。ある事件を俺が解いてからこうやって難事件について調べて解決していた。そしてたまたまこの事件を見つけて雛見沢にきた。それが俺がここに来た理由だ……失望したか？」
「…別に雄ちゃんが何しようと構わないんだけどさ、一つお願いがあるんだけど・・・・・・」
魅音は申し訳なさそうに言ってきた。
「んっ？」
「け、圭ちゃんには、この事件のこと言わないんで欲しいんだけど・・・・・・」
「ふっ、優しいんだな」
魅音の顔が少し赤くなった。
「わかった。約束する」
「ありがとう」
「・・・・・・少し話をしてもいいか？」
「ああ、別にいいけど」
「この事件を調べているうちに仲間を疑ったり、秘密を知ったりしたときに俺は何か罪悪感を感じた。仲間が疑われる要素があったらその否定の材料を見つけようとしたりしていた。何かここに来て少し俺は変わってしまったのかもな」
「変わったんじゃない？最初と違って明るくなったし」

「そうかもな」
「雄ちゃんの方が優しいじゃん」
「お、俺なんか全然」
「あのさ・・・・・・」
「んっ？」
「園崎家の事・・・疑ってる？」
「……」
「答えなくなかったら別に……」
「疑っていないとは言えないが、黒ではないと思っている。まだ園崎家には何も証拠がないからな。推測で一つだけを疑ってはいけない。周りをよく見ないと事件は解決できない」
「何それ？探偵の鉄則みたいなもの？」
「そんな感じかな？・・・・・・最後に一つだけ言っとく。俺は、園崎家は白だと思ってる。今はそれだけだ」
そして、雄斗は雄斗の家に向かって歩いていった。
魅音は雄斗の後ろ姿をしばらく見ていた。

第九話　魅音の思い（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、今回も始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。今回もグダグダトークもしたいと思います…出来ればいいと思います…
　ではさっそく、今回のゲストをご紹介しましょう。今回のゲストはこの方っ！！！」
詩音「はろろ～ん☆園崎詩音です。やっと登場しました！」
黒狐「やっと、登場だな」
詩音「ええ、ようやくです。どうせなら、前の回で出して欲しかったです」
黒狐「毎回クジだから。それがこのラジオの醍醐味だし」
詩音「じゃあ、梨花ちゃんのほっぺでも」
黒狐「もういいつーの」
詩音「冗談です☆」
黒狐「深夜にあれは食いたくない・・・」
詩音「寝る前ですもんね」
黒狐「あれ食ったら寝れねーよ」
詩音「スタンガンでぐっすり眠らしてあげましょうか？」
バチバチッ
黒狐「全力で遠慮します！」
詩音「残念です☆」
黒狐「ちなみに毎回のコーナーなんですが、いいのが浮かび次第、その時のゲストでそのコーナーをやりたいと思います」
詩音「ちなみに今回のやりたいコーナーは？」
黒狐「今回はトークでっ！」

詩音「考えてないと？」
黒狐「まあ…そうだな」
詩音「……」
黒狐「スタンガンを静かに持つんじゃねぇーっ！」
詩音「まあ、しょうがないからトークでもやりましょう☆」
黒狐「ああ。まず最初に私が約半年ほど前に書いていた小説『ＴＲＵＴＨ』を完結させました。今まで見てくださった皆様、応援ありがとうございました」
詩音「じゃあ、続いているのはこの『ひぐらしのなく頃に　闇灯し編』だけですね」
黒狐「ああ、そうだな」
詩音「他に予定とかは？」
黒狐「もちろんありますよ。ちなみにまず一つはオリジナル小説です。もう一つはいろいろあります。ラジオ番組、バラエティー番組などの小説などなどです！」
詩音「時間がないのが残念ですね」
黒狐「そうだな。ストーリーの案はだいたい浮かんでいるからな。本当に時間が欲しい」
詩音「あっ、もう二時ですね」
黒狐「そうだな、眠くなってきた」
詩音「これで起こしましょか？」
黒狐「スタンガンはそこに置こうか」
詩音「えー★」
黒狐「つっこむ気力が無い・・・」
詩音「じゃあ、最後にこれからの私の出番とか用意してるんですか？」
黒狐「しばらくは無いかもしれないが、予定はある。しかも、かなりの大きい役だな」
詩音「本当ですか☆無かった場合、罰ゲームで★」
黒狐「罰ゲーム・・・」

詩音「大丈夫ですよ！出番さえ作ってもらえれば」
黒狐「もう作らないといけないな」
詩音「この本編の雄ちゃんと同じように軽率な発言は禁物ですよ☆」
黒狐「肝にめいじとくよ・・・じゃあ、今回はこのくらいでシメようか？」
詩音「そうですね。もうこんな時間ですし」
黒狐「このラジオは長い時間書いているが、キャラが毎回変わると、大変さや楽しみが多いな。これからも頑張って続けていきますっ！」
詩音「じゃあ、シメましょう☆」
黒狐「ああ、お相手は眠たい黒狐とっ！」
詩音「園崎詩音でっ！」
黒狐・詩音「「お送りしましたー！」」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです。やって欲しいコーナーなども募集中っ！皆様のご協力お願いします。お気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます」

今回の黒狐の心の叫びっ！
黒狐「黒狐の新たな小説も応援よろしくっ！！！！来年始動予定っ！！！！！」
詩音「出番の方、期待してますからね☆」

第十話　雄斗ＶＳ沙都子

次の日の朝、雄斗は教室の前の扉の前に立っていた。雄斗の後ろには魅音と圭一とレナがニヤニヤしながら俺を見ていた。
はぁ、本当にやるのか……しょうがないか……
そう、雄斗は勝手に挑戦することになってしまったのだ。
沙都子のトラップに……
「沙都子、無事に中に入ったら俺の勝ちなんだよな？」
「無事に入れるとでも思ってございますの。謝るなら今のうちでございましてよ。をーほっほっほっほ」
「絶対勝ってやる！」
やるからには勝ってやる！
俺はなぜか闘志に火がついてしまったようだ。
そういって俺は違う方の扉に向かった。
そして、おそるおそるドアを開けた。
すると、扉の向こうから紐でくくられた新聞紙の束が飛び掛ってきた。
「なっ！」
俺はそれを横にかわした。
その新聞紙の束は天井に吊るされていたらしく、まだプランプランと揺れていた。
「後ろに来ることも読んでいたか…しかし、これでトラップを解除」
そして、扉の確認。問題は無かった。
俺は下を見た。
何も仕掛けられてないようだ。
俺は慎重に中に入った。

一歩目を踏み出した瞬間上からたくさんの新聞紙が降り掛かってきた。
「なっ！！！」
そして、俺の敗北が決定してしまった。
俺が教室に入るタイミングを見計らって、沙都子により上から新聞紙を落とされた。
「をーほっほっほっほ。私のトラップは誰にも止められないのでしてよ」
沙都子の手には何かの紐が握られていた。
「さすがだな、沙都子」
そういって、俺は新聞紙をどけて中に入った。
そして、新聞紙が落ちてきた場所を見た。
「ふっ」
俺は笑ってしまった。
俺が笑ったのには理由があった。
「残念だったな、雄斗」
圭一は笑いながらそういって教室の中へと入った。そのとき圭一の頭に盥が勢いよく直撃した。
「あはははは、どんだけ用意してるんだ」
そう、さらにもう一つのトラップが仕掛けてあったのが、俺が笑ったものだ。
新聞紙と盥。
新聞紙でよかった。
俺はその横で胸を撫で下ろしていた。
「さ、沙都子ぉおおお。てめぇー」
圭一は沙都子に襲い掛かった。だが、沙都子は圭一をかわして、教室の中で逃げ回ってた。
「待てぇー、沙都子！」
「捕まえられるなら捕まえてくださいましー」
沙都子はニコニコしながら逃げ回っていた。

そして魅音とレナは教室に入った。
「残念だったね、雄ちゃん」
「ははは…」
すると俺たちに向かって沙都子が走ってきた。そしてレナに飛びついた。
「うわああん、圭一さんがいじめてきますの～」
沙都子はレナに甘えた。
「なっ！」
「はううう～、沙都子ちゃんかあいい～よ～」
スパパパパーン――――
一瞬のうちに圭一は床に倒れた。いや、張り倒された。
レナの腕の残像が見えたのは俺の気のせいなのか？
「・・・・・・何これ？」
「ああ、かあいいモードのレナだよ。かあいいものを見ると超人になっちゃうの」
「ははは・・・・・・」
連続怪死事件の犯人はレナじゃないかと伺うほどの凄さだった。
前の入って来た扉と逆の扉を見るとそこには何も無かった。
完全に読まれていたのか……
新聞紙と盥の二重トラップ。
沙都子は圭一に当てることも考えていたのか？
北条沙都子、恐るべし！

第十話　雄斗ＶＳ沙都子（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、今回も始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの黒狐です。深夜一時半より放送開始しましたっ！ではさっそく、今回のゲストをご紹介しましょう。今回のゲストはこの方っ！！！」

梨花「古手梨花なのですよっ！にぱ～☆」

黒狐「相変わらずの狸っぷりだな」

黒梨花「何か言った？」

黒狐「ナニモイッテナイデスヨー・・・」

梨花「ゲストの最後って私なのですか？」

黒狐「いや、まだ雄斗が出てないよ」

梨花「終わったらゲストはどうするのですか？」

黒狐「またクジにしたり、本編で活躍した人を出したり、ダブルゲストにしたりだとか考え中」

梨花「オリジナルはいつ出すのですか？」

黒狐「う～ん、年が超えるとともに出そうかな」

梨花「どれくらい書けてるのですか？」

黒狐「１０ページくらい。まだ、まとまってないからいろいろと調整してから出す予定」

梨花「こっちの方も、ファイトーオーなのですよ☆」

黒狐「そして、皆さんにお知らせがあります」

梨花「お知らせなのですか？」

黒狐「ああ、バトスピファン必見ですっ！」

梨花「また小説書くのですか？」

黒狐「いや、もう投稿中なんだよ」

梨花「事後っ！？」
黒狐「バトスピの小説ではありませんっ！」
梨花「んっ？」
黒狐「Ｙｏｕｔｕｂｅでバトスピ対戦動画を投稿しちゃいましたっ！！！」
ジャジャーン！
梨花「まったく関係がないのですよ」
黒狐「『バトルスピ？リッツ』バトスタ！ＰＡＲＴ１　（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝ｆＷＲｔｘ４ｊＨＯＢｃ）ですっ！是非見てくださいねっ！」
梨花「では、ここで読者が楽しみにしてる企画をやろうと思いますのです☆」
黒狐「楽しみにしてる・・・？」
梨花「羽入っ！」
がちゃっ
羽入「皆さん、こんばんは。羽入なのですよ！あうあう☆」
黒狐「なんで羽入が・・・ってか羽入・・・・・」
羽入「どうしたのですか？黒狐」
黒狐「お前は何を持ってるんだ？」
羽入「シュークリームなのですよっ！」
黒狐「中身は？」
梨花「一つは甘い甘いクリーム。もう一つは梨花秘伝のソースなのです★」
黒狐「嫌だっ！」
黒梨花「当たりを引けばいいでしょう？」
黒狐「・・・よしっ！やってやるっ！そのかわり、これを見てる読者っ！感想や評価の方頼むぞっ！！！俺は体を張ってやるっ！！！！」
梨花「ファイトー、オーなのです★」
羽入「黒狐、選ぶのですよ」

黒狐「ってか、羽入って呼ぶ必要あったのか？」
梨花「アシスタントです！そして、黒狐がはずれを引いたときに甘いシュークリームを食べる役目ですっ！」
黒狐「もうなんでもいいよ。じゃあ、選ぶぞっ！」
梨花「じゃあ、どうぞなのです！」
黒狐「いくぞーっ！！！」
ガブッ！！！
黒狐「げほっ、げほっ、げほっ、げほっ、あぁあああああああああああああああ」
梨花「見事に当たりを引いたのですよ。当たったということで評価もどんどん上がっていくのですよ☆よかったですね」
黒狐「よぐねぇー、げほっ、げほっ、げほっ、あぁあああ」
羽入「梨花っ！」
梨花「そうですね。じゃあ、羽入に当たりをプレゼントですよ★」
羽入「いっただきま～すっ！！！」
パクッ！
羽入「はにゅ～、げほっ、げほっ、りがぁあああ～、げほっ、げほっ、はめましだのですね、げほっ」
梨花「じゃあ、二人がダウンしたところで、次回のゲストは誰なのでしょうか？
『ひぐらしの彩るラジオ』のお相手は、古手梨花と黒狐と羽入でお送りしました～★
感想など待ってるのですよ☆誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいのですよ。黒狐さんはツイッターもやってるので、そちらのほうもチェックなのですっ！！！つまんないと思うけど」
黒狐「おいっ！げほっ、げほっ」
羽入「げほっ、げほっ」
梨花「さて次回の犠牲者は誰なのでしょうか？にぱ～★」

今回の黒狐の心の叫びっ！（後日ｗｗｗ）

黒狐「もう嫌だ。寝れねーよっ！あんなもの食ったあとじゃっ！よ～しっ！他のメンバーにもお見舞いしてやるかっ！！！感想のほうよろしくっ！ラジオでやって欲しい企画募集中！」

第十一話　鷹野三四

雄斗は学校が終わってから興宮の図書館に来ていた。
そして机の上で雛見沢連続怪死事件についてのノートにメモを取っていた。その横には雛見沢に関する歴史の本が積んであった。雄斗の片耳にはいつも通りイヤホンを付けていた。
雄斗はまだ真相には全く近づけていなかった。全てが謎だらけであった。容疑者、謎の数がこんなに少ない事件は初めてだった。さらに、こんなに証拠の無い事件もはじめてだった。だから雛見沢の歴史にまで手を出しているのだ。それくらい、難解な事件だ。迷宮入りになってもおかしくない。
ノートにはそれぞれの年の亡くなった人の関係を書いているだけだ。
俺はあらゆる角度からこの事件をみることにしたのだ。
一年目、ダム建設の監督。二年目、ダム推進派。三年目、中立派。四年目、ダム賛成派の縁者。
行方不明者の関係は――――
一年目、ダム建設の従業者。二年目、ダム推進派。三年目、中立派。四年目、ダム賛成派の縁者。
関係していることは、全てがダム戦争の延長。
雄斗にはもう一つの仮説があった。それは誰かが殺人者に入れ知恵をしているのではないかということだ。
例えば、一年目ではダム建設の従業者は、ダム建設の監督を憎んでいた。誰かが従業者に入れ知恵をして殺させた後に従業者を始末した。四年目は、北条悟史はその叔母を殺すために、誰かから入れ知恵をしてもらった。そしてその誰かに始末された。でも二年目と

三年目が繋がらない。もし、古手の妻が夫を憎んでいたとすれば、成立する。二年目はそう簡単にはいかない。沙都子に入れ知恵をして、両親を殺したところまではいいとして、なぜその入れ知恵をした誰かは沙都子を殺さなかったのが謎になってくる。

顔を隠して、近づいたのか？

そしてその仮説は途中で行き詰ってしまうのだった。

俺はペンをくるくる回しながら、ノートをじっと見ていた。

なにか浮き出てこないかな～

そんなことあるはずがない。何考えてるんだか……

「雛見沢連続怪死事件・・・オヤシロさまの祟り・・・・・・」

俺はバッと後ろを振り向いた。

そこには金髪の女の人が立っていた。

「あなた、雛見沢連続怪死事件に興味があるの？」

「ーーーっ！」

俺はイヤホンを外した。

そして、後ろを振り返った。

「あら、いきなりでごめんなさい。私は鷹野三四。うれしいわ・・・オヤシロさまの祟りについて研究する同士に出会えて。くすくす・・・」

「俺はみ――――」

「あなたのことなら知ってるわ。御神雄斗。そして東京の名探偵でもある」

「・・・その通りです。でもなぜ俺のことを？」

「一回、あなたのことを新聞で見たことがあるのよ」

「そ、そうですか・・・・・・」

確かにあの事件解決の時に写真を撮られた気がした。普段は取材やテレビの出演などを断っているのだが、ある事件のときに不意に撮られてしまったことがあった。

探偵なので、あまり顔を知られたくなかったのだが・・・・・・

「それだけじゃないのよ。あなたが雛見沢に引っ越してきたから、

雛見沢ではもうあなたは有名よ。知らない人なんていないじゃないんじゃないかしら」
「田舎に都会の人が引っ越すことは珍しいからですか？」
「ええ、とっても珍しいことなのよ。前にも前原君も来るのこんな感じだったわ。ふたりとも雛見沢では有名よ」
「・・・・・・ところで鷹野さんは何かこの事件について知っているんですか？」
雄斗は核心に迫った。
鷹野さんは雄斗の横の椅子に座った。
「オヤシロさまの祟りと呼ばれる一連の雛見沢連続怪死事件。いずれの事件も個別に見えながら確実に一つの意思に基づいて行われる」
「それが毎年一人が死んで、一人が行方不明・・・ですか？」
「私は行方不明ではなく生け贄にささげられているのだと思うわ。だから毎年祟りが起こるたびに、お怒りを鎮めるために生け贄をささげる必要があったの。つまり、雛見沢連続怪死事件とは、祟りと生け贄の二つでセットとなったもの。それを繰り返すことによって、ダム戦争時の仇敵を毎年二人ずつ殺していけるシステムなの。雛見沢の古い風習を再現した連続殺人事件なのよ！」
「ということは犯人は園崎家だと？」
「そうも考えられるわね」
「他にもいると・・・・・・」
「オカルト好きな人とかもね。名探偵の御神君はどう考えているの？」
「鷹野さんと一緒のことだと思いますよ。今は行き詰っていて雛見沢の歴史について調べていたところですから」
「つまり言いたくないと？」
「そういうことにもなりますね。でも今のところは、ほとんど一緒だと思いますよ」
俺は椅子に思いっきりもたれかかった。
「犯人は他にもいるかもね。くすくす・・・」

「他にも？」
「そう、それはオヤシロさまを熱烈に崇拝する狂信者というべき人。彼らはオヤシロさま信仰が衰退していくのを見過ごせることができず、オヤシロさまの威光を復活させようと考えた計画が雛見沢連続怪死事件。通称オヤシロさまの祟り」
「・・・風習になぞらえ一人には死を、もう一人には鬼隠しを。それを利用して村人にオヤシロさまの存在を知らしめようとしている。そんなところですか？」
「さすが名探偵ね。くすくす・・・」
「それらから考えると雛見沢の人が犯人だということになりますね」
「そうね。雛見沢の古い伝承にはオヤシロさまの祟りで人が死ぬとオヤシロさまの怒りを鎮めるために生け贄をさらいに来て底なし沼に沈めたという話があるわ。そして過去の事件は綿流しの前日に起きていることと一人が死んで、一人が消えている。それらのことによって雛見沢の人の犯行の証拠にはならないかしら？」
「正解とは言い切れませんね。例えば、雛見沢に恨みを持っていて、鷹野さんみたいにオカルトに興味を持ってる人だったら犯行可能じゃないですか？しかもその情報は調べれば手に入る。だから雛見沢の人間が犯人だということではないと思います」
「それもそうね、くすくす・・・」
俺は椅子の背もたれから体を離した。
「じゃあ、俺からも一つ。俺の考えている犯人は大掛かりな組織だと考えている」
「へぇー、興味深いわね」
「全ての事件に、大きな組織の力がないと無理なものがある。だから俺はそう考えている。鷹野さんはこの近くにある大きな組織といったら何があると思いますか？」
「そうねぇー、くすくす・・・。やはり園崎家じゃないかしら」
「やはり園崎家ですか・・・・・・」
「やはりってことはあなたも疑ってるの？」

「今のところは全てですよ。この事件には決定的な証拠が無いですから。関係性のあるものなら徹底的に調べ上げるしかないですからね」
「御神君は他に何か考えているの？」
「・・・大きな組織」
「・・・・・・大きな組織？」
「はい、ほとんどの事件には大掛かりなことがしている。例えば、留置所の人間を使ったりとか」
「園崎家も入るんじゃない？」
「一応、入ると思うんですが、何年も調べて証拠が一つも出ないのはおかしい。だから園崎家とは限らない。そして、園崎家なら証拠を残すはずがない」
「さすが名探偵ね。くすくす・・・。何かまた分かったら教えて頂戴。多分ほとんどは入江診療所にいると思うから」
「そうなんですか」
「ええ、私はそこでナースをしてるの」
すると、俺の目の前に何かのファイルが差し出されえた。
「何です？それ」
「私の研究記録の詰まった門外不出の資料よ。よかったら読んで欲しいの。もしかしたらあなたはオヤシロさまの真実が掴めるかもしれないから」
「オヤシロさまの真実・・・・・・」
「鷹野さん」
後ろから、男性の声が聞こえた。後ろを振り返ると、そこには温厚そうな顔をしている筋肉質な男性がいた。
「えーっと、あなたは？」
「僕は富竹！フリーのカメラマンさ。」
「俺は御神雄斗です」
「へぇー、あの名探偵の？」
「あ、あなたも知ってるんですか・・・・・・」

はぁ、こんなにも知られているなんて・・・・・・・
俺は落ち込んでしまった。
「新聞に載っていたからね。名探偵、御神雄斗って」
「ははは・・・・・・」
「じゃあ、私たちはもう行くわね。楽しかったわ、雄斗君。話ができる同士に出会えて・・・・・・」
鷹野さんは立ち上がった。
「でも一つお願いね。このスクラップ帳の事は誰にも内緒よ・・・・・・だってこんな研究をしているのが狂信者達に見つかったら・・・消されてしまうのかもしれないものね。くすくす・・・」
鷹野さんと富竹さんは出口に向かって歩き始めた。
雄斗は鷹野と富竹を見ていた。

第十一話　鷹野三四（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、今回も始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの風邪から回復しそうな黒狐です。今回はベッドに寝ながらやりたいと思います。ではさっそく、今回のゲストをご紹介しましょう。今回のゲストはこの方っ！！！」

雄斗「はじめまして、御神雄斗です」

黒狐「現在の最後の部活メンバー。御神雄斗さんです！」

雄斗「ってか大丈夫なのか？」

黒狐「昼寝て、若干回復したから大丈夫。この放送が終わったらすぐ寝るから」

雄斗「今週、無理していってついに限界が来たんだっけ？」

黒狐「ああ、おかげで、小説のストックが切れたよ」

雄斗「頑張って書かないと」

黒狐「そうだな。間違いなく頭痛の原因は梨花ちゃんのシュークリームだっ！」

雄斗「違うと思うけど・・・」

黒狐「じゃあ食うか？」

雄斗「あるのっ？」

黒狐「ないよ。あったら怖いだろ？」

雄斗「まあな。それよりこの小説の先とか考えているのか？」

黒狐「もちろんっ！今は原作にそっているが、あと、５話くらいあとには、雄斗を全面的に押し出す予定。早く書いて、投稿して黒狐の凄さを伝えたい」

雄斗「じゃあ、頑張ってかけよ」

黒狐「もちろんだ」

雄斗「次回のこのラジオどうするの？」
黒狐「二つの道を考えてる」
雄斗「二つの道？」
黒狐「一つは、黒狐の気のままにいつも通り行う。そして、もう一つは独立させる」
雄斗「独立っ！？」
黒狐「ああ、独立だ。黒狐ラジオを新たに制作してラジオメインの小説を作成することを考えてる」
雄斗「決定事項」
黒狐「もちろん未定だｗｗｗ」
雄斗「いつも通りだな」
黒狐「でも、いつかは決行するかな？」
雄斗「また、決まったら教えろよな」
黒狐「ああ、今回はえらくなってきたし、この辺にしますっ！」
雄斗「コーナーないの？」
黒狐「またな」
雄斗「おいっ！」
黒狐「ああ、お相手はダルい黒狐とっ！」
雄斗「はぁー、何かやりたかった御神雄斗で！」
黒狐・雄斗「「お送りしましたー！」」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです。やって欲しいコーナーなども募集中っ！皆様のご協力お願いします。お気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます。評価の方もよろしくっ！」

今回の黒狐の心の叫びっ！
黒狐「やりたいことがたくさんあるが、風邪引くなんて～」
雄斗「そのせいで俺の出番が・・・」
黒狐「また出してやるからさ！」

第十二話　過去の罪

雄斗はあれから二時間くらい図書館にいた。
そして、雄斗は家に帰って、今、目の前には鷹野さんのスクラップ帳が置いてある。
これを見れば何かわかるかもしれない……
雄斗は鷹野さんのスクラップ帳に目を通した。
そのスクラップ帳には雛見沢の黒歴史、昔の伝承や掟、オヤシロさまの伝説が書かれていた。例えば、雛見沢の村人には人喰い鬼の血が流れていて、綿流しは元々は人喰い鬼の宴だったことなどのことが書かれていた。
今日の収穫は雛見沢の歴史についてだけだった。
真相には全く近づけていないだろう。
もし、五年目があるのだとしたら、誰が死んで、誰が消える。今までに関係するものは何なんだ？・・・・・・・・・・・・だめだ、全然浮かんでこない。全ての始まりの雛見沢ダム建設計画で損をするなら誰だ・・・・・・そして、得をするのは誰だ………
ピーンポーン―――
家のチャイムが鳴ったので、俺は玄関に向かって、玄関の扉を開けた。
そこにはレナが立っていた。
「こんばんわ、雄斗君」
「どうしたんだ、レナ」
「あ、あの・・・クッキー作りすぎちゃったんだけど・・・貰ってくれる？」
レナの手にはリボン付のかわいい小さな袋が握られていた。

「あ、ああ。喜んで受け取るよ」
俺はレナからクッキーが入っているリボン付の小さな袋を受け取った。
「あ、あのっ、雄斗君。できれば話がしたいんだけどな・・・・・・・・・」
どうやらクッキーを渡すことが本当の目的ではないそうだ。
「・・・・・・上がっていいよ」
俺はレナを家の中に入れた。そして、急いで部屋のものを片付けて、レナにお茶を出した。
片付けるというよりは押し入れにものをぶち込んだだけだが……
「ありがとう」
「ところで話って何？」
「最近、雄斗君に元気がないと思って・・・」
「そうか？」
「うん。授業中でも何か悩んでいるように見えるよ。何か悩み事があるのかな？」
「心配してくれてたんだな。ありがとう、レナ」
「う、ううん。よかったらその悩みを話してくれないかな？」
「・・・・・・・・・・・・・・」
「別に嫌だったら言わなくてもいいんだよ」
「・・・・・・・・・・・レナは俺がなんでここに来たのか、わかってるだろ？」
「・・・・・・・うん」
「やはりな。この前、大石さんと一緒にいたところを見られたから、レナはもう知ってるんだと思った。違うか？」
「ううん、合ってる。雄斗君は雛見沢連続怪死事件について調べてるんでしょ」
「ああ、その通りだ……レナに全てを話そうと思う」
俺はレナに全てを話そうと思った。理由は自分でもわからない。でもそう思った。

そして俺のことを全て話した。両親のことも、俺のことも。
「そうなんだ。やっぱりすごいね、雄斗君は」
「・・・レナに一つだけ謝らないといけないことがある・・・・・・・俺は大石さんからレナの過去を聞いた」
「――――っ！」
レナの顔が暗くなった。
「そ、そっか・・・知ってたんだ・・・・・・・」
「悪かったと思ってる」
「ううん、別にいいよ。そんなこと知ってたんじゃ私のこと・・・怖いよね」
「そんなことはない！絶対にだ！誰だって間違うことはある。俺だって・・・・・・・・・」
手が震えていた。俺は手をグッと握り締めた。
レナは心配そうに見ていた。
「俺だって東京にいた時に間違いを犯した・・・。実は・・・俺は友達を殺しかけたことがあるんだ……ある事件で学校の同じクラスの男子生徒が事件の容疑者になったんだ。彼は本当に無実だったんだ。でも俺は、その事件の犯人をその人だと決め付けて、その人に問い詰めた。それが彼にとって辛い苦痛になっていたんだ。そして俺は彼の家に話を聞きに言ったときに……リビングの窓から彼が首を吊っているところが見えたんだ。俺のせいで、彼を死に追いやってしまった。それから彼は病院で奇跡的に目を覚ましたんだ。でも彼が生きていたからといって俺の罪は消えるわけではない。どんなに償っても消える訳が無い。それが俺がみんなに隠していたことだ」
レナは真剣な顔をして俺を見ていた。
「こんなことを話して許してもらおうとは思わない。レナ・・・本当にごめん！」
俺は床に頭を付けて謝りつづけた。
「いいよ。隠していたレナが悪いんだし」

「あ、ありがとう・・・」
「ううん、雄斗君の悩みを聞けてよかった。こんな時間にごめんね。すぐに帰るから。また明日」
「…ああ、また明日」
レナは立ち上がって、家から出て行った。
俺はしばらくいろいろと考えていた。

そして翌日の朝、雄斗は制服を着て部屋にいた。学校に行く準備が整っていた。
ピーンポーン―――
雄斗はすぐに玄関に行き、扉を開けた。そこには笑顔のレナが立っていた。
「おはよう、雄斗君」
「お、おはよう」
こうして、優斗達は学校へと向かった。
そうして、いつも通りの日常が始まった。
今日はしっかりと学校のことを取り組むことをした。雛見沢連続怪死事件のことを学校で考えないことにした。久しぶりに学校を楽しもうと思った。
授業、昼休み、部活メンバーとの絡み合いなどがより楽しく思えた。こんな気分は久しぶりだった。前の学校では全く馴染めていなかったし、友達も少なかった。毎日が退屈だった。
でも今は違った。この学校に引っ越してきてよかったと思えた。
そして放課後になり、いつも通りに、魅音と圭一とレナと一緒に学校から下校していた。それから魅音と圭一と別れて、レナと二人っきりになった。
「れ、レナ」
「何？」

「昨日はありがとな」
「ううん、雄斗君が元気になってよかった」
「学校ではもう事件のことを考えるのをやめることにする。精一杯、楽しむことにするよ」
「うん。そうした方がいいよ・・・・・・・・・雄斗君」
「んっ？」
「どうして探偵を続けてるの？あんなことがあったのに」
「・・・・・・・・・」
「ご、ごめんなさい。こんな事――――」
「レナの言ってる通り、俺も事件にかかわるのはやめようと思った。その失敗がとても苦しかったんだ。その苦しみは、死ぬよりも辛かった。でも殺しかけてしまった彼が俺にこう言ったんだ。『これからも事件を解決して、苦しんでいる人を助けてやってくれ。俺のことは別に気にしなくていいから。失敗は誰にでもあるから』そう言ってくれたんだ。だから探偵を今でも続けている」
「その・・・・・・・」
「別に気を使わなくてもいいよ。多分その事件のことが気になったんだろ？」
「・・・・・・・うん」
「俺はその言葉を聞いてから、すぐに真犯人を見つけ出した。そして事件を解決することができた」
「そうなんだ」
「れ、レナ。こんなときに言うことじゃないかもしれないんだけど・・・・・・雛見沢連続怪死事件について知ってることがあったら教えて欲しい」
「・・・・・・・わかった。でもこんなところじゃいえないかな」
「そ、そうだな外では言えないよな」
そうして雄斗はレナを家に入れた。雄斗はレナにオレンジジュースを出した。
「ありがと」

ついでに俺のコップにもオレンジジュースが注がれている。そして俺はそれを半分くらい飲んだ。レナは少し飲んで、机の上にコップを置いた。
「あの・・・・・・こんなこと言ったら・・・笑われるかもしれないけど・・・・・・・・・・私……オヤシロさまに会ったことがあるの」
「えっ！」
「雄斗君は知ってるけど、レナが起こした事件の後に、何もかもが嫌になって病院で自分を刃物で傷つけたことがあったの」
レナは自分の手をぎゅっと握り締めた。体は少し震えていた。
「そ・・・そのときに私の体からうじ虫が湧き出してきたの」
「う、うじ虫・・・・・・」
「・・・・・・妄想だって言われるかもしれないけど・・・でも確かに体中の血管にうじ虫がうごめく感じがしたの。かゆくてかゆくて・・・掻いても掻いてもうじ虫達を掻き出せなくて、黄傷口からどくどく血が出ても掻き続けた。そのときにオヤシロさまに会ったの。そしてオヤシロさまがうじ虫を体から消してくれて、雛見沢に帰るように言ってくれたの」
レナは下を向いていた。
手も震えていた。
俺はレナの手を握った。
「もういいよ」
「あ、ありがと……」
レナの震えは止まった。
「村を離れてはいけないか・・・・・・」
「えっ？」
レナを俺を見た。
「いや、なんでもない。俺は今の話を信じるよ」
「あ、ありがとう」
「もしそれが本当ならこの事件の犯人は人間のだな」

「えっ・・・なんでそういえるの？」
「レナを助けてくれた優しいオヤシロさまのなら、こんな事件を起こすはずがない。誰かがオヤシロさまを偽って事件を起こしている」
「そ、そうだね」
「話してくれてありがとう・・・・・・また何かお礼をさせてもらうよ」
「いいよ、そんなの」
「せっかくだから昨日もって来てくれたクッキーを持ってくる」
そうして俺はキッチンに向かった。
オヤシロさまは実在する。それは本当なのか？・・・・・・考えるのは後からでもできるか。早く戻らないとな。
そして、雄斗はレナから貰ったクッキーを持って、レナの元へと急いだ。
それから小一時間、レナと話をしていた。話といっても事件のことではない。なんでもないような世間話的なものだ。その一時間はとても楽しかった。事件のことも忘れてしまっていたくらいだった。
しかし、レナが言っていたことは、この事件に関係するのだろうか？本当にオヤシロさまの祟りなのか？自分でも何がなんだかわからなくなってくる。
しかし、少し道が見えた気がした。

第十二話　過去の罪（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、今回も始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの風邪から復帰した黒狐です。最近、咳がちょっと出始めてますが、ではさっそく、今回のゲストをご紹介しましょう。今回のゲストはこの方っ！！！」

圭一「俺、前原圭一だ。よろしくー！」

雄斗「御神雄斗です」

黒狐「今回は二代主人公をお呼びしました！！！」

圭一「久しぶりだな、このスタジオ」

雄斗「俺は前回来たぞ」

黒狐「本当はラジオだけのやつを作ろうと思ったけど、まあ、いいかな～って」

圭一「特に最初に思ってたような変化はないようだな」

黒狐「・・・梨花ちゃんのなんやらわからないものが開発されたが？」

雄斗「かわったのか？」

黒狐「辛さが増した」

圭一・雄斗「ははは・・・」

黒狐「最近はバトスピ対戦動画とか始めたから、忙しくなった」

圭一「当たり前だ」

黒狐「ちなみ、オリジナル小説は１０ページくらいかけた。そこで次の展開に悩んでる」

雄斗「そんなこと言ってたな」

圭一「この小説はちゃんと進めてるのか？」

黒狐「大丈夫だ。今日頑張って書いた！」

圭一「なんとか進んでるようだな」
雄斗「前から更新するっていってたしな」
黒狐「ああ、今は一つのしょうせつだからな。ごほっ、ごほっ」
圭一「風邪だな」
雄斗「そうだな」
黒狐「悪い悪い」
圭一「ちなみに今後の展開は？」
黒狐「秘密です」
圭一「ですよね～」
雄斗「ってか未定じゃないのか？」
黒狐「未定ではない！書いてないだけｗｗｗ」
圭一・雄斗「おいっ！！！」
圭一「最近の後書き短くなってないか？」
黒狐「いいや、今までが異常だったんだよ」
圭一「そうだな、最初は短かったしな」
黒狐「俺がコーナーとかしたからな」
雄斗「そうだったのか？」
黒狐「詳しくはザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～の第四話前編　ついにレナの秘密が！！悲しき友情の真実でっ！ここからラジオは始まりました」
雄斗「後書きだけ見るか」
黒狐「出来たら本編もな！」
圭一「そうだな。俺がメインのやつだし」
黒狐「あるメンバーから恨みをかった作品だよ」
圭一「ははは・・・」
黒狐「じゃあ、今回はこんなものにしようかな？」
雄斗「ああ」
圭一「そうだな」
黒狐「今回のパーソナリティーは忙しい黒狐とっ！」
雄斗「御神雄斗と！」

圭一「前原圭一でっ！」
黒狐・雄斗・圭一「「お送りしましたー！」」

黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれれば嬉しいです。やって欲しいコーナーなども募集中っ！皆様のご協力お願いします。お気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます。評価の方もよろしくっ！」

今回の黒狐の心の叫びっ！
黒狐「三人でやるのっていいな。次回も3人で！！！」

第十三話　前進・・・

雄斗は学校が終わってから入江診療所に来ていた。学校ではレナと約束したように、事件のことを忘れて今日も楽しんだ。
少し楽になれた気がする。
雄斗が入江診療所へ訪れた目的は、鷹野さんに借りたスクラップ帳を返すことだった。それに入江診療所には一回も訪れたことはなかったからだ。
診療所の中に入ると、待合スペースがあったが、そこには人が一人もいなかった。中は結構きれいだった。
「あら、御神君じゃない」
奥のほうから鷹野さんが出てきた。
「先日はどうも。今日はこれを返しに来たんですが・・・・・・」
雄斗は鷹野さんにスクラップ帳を差し出した。
「もう全部読んだの？」
「はい、一通りは目を通しました」
「そう・・・何かわかったことはあったの？」
「わかったことは雛見沢の歴史についてくらいです。事件の進展は全然です」
「それは残念ね・・・何か面白いことが聞けると思ったんだけど・・・・・」
「でも絶対この謎を解決して見せますよ」
「楽しみにしてるわ・・・くすくす」
「おや、御神さんじゃないですか」
横から男の人の声が聞こえた。その人は白衣を着ていて、眼鏡をかけていた。

「あの、あなたは？」
「これは失礼。私はここの医師の入江京介です」
「はじめまして、御神雄斗です」
「知ってますよ、雛見沢ではもう有名ですよ」
「そ、そうですか・・・・・・」
「聞きましたよ、名探偵だそうじゃないですか」
「入江先生も新聞で知ったんですか？」
「新聞？違いますよ、鷹野さんから聞いたんですよ。御神さんは新聞にも載ったことあるんですか？」
「ま、まあ、知らないうちに撮られたんですけど」
「そうなんですか。何かオヤシロさまの祟りについて何かわかりましたか？」
「全然ですよ。こんな事件初めてです。証拠がこんなにないのは」
「そうですか、今日は何か御用ですか？」
「いえ、鷹野さんに借りたものを返しに来ただけですよ。じゃあ、これで失礼します」
俺は頭を下げて、ここを出て行こうとした。
「御神さん、腕から血が出てますよ」
「えっ？」
雄斗は自分の腕を見た。雄斗の腕はどこかでぶつけたような傷があった。いや、掻いたのか……どこで怪我した？
その傷からは血が出ていた。
「あっ、本当だ」
「手当てをしますので、奥へどうぞ」
「すいません」
そうして俺は診察室で、入江さんから腕の簡単な手当てを受けていた。
「雛見沢はどうですか？慣れました？」
「良い所だと思いますよ。空気も良いですし。俺はここに来てよかったと思ってます。何か変われた気がします」

「そうですか。それはよかったですね」
「俺が雛見沢に来た理由は、雛見沢連続怪死事件について調べに来たんです」
「そ、そうなんですか」
「はい、だから何かこの雛見沢連続怪死事件について知りませんか？」
「い、いえ、私はそのことについて知りません」
「そうですか。ところで、入江さんは綿流しに行くんですよね？」
「ええ、もちろんですよ。私こう見えても綿流しの実行委員会の役員なんですよ」
「それは大変ですね」
「御神さんも良ければ来てください」
「わかりました」
そのときに、俺の腕の手当ては終わった。
「手当てありがとうございました。是非、綿流しに参加させてもらいます」
そういって俺は診療所を後にした。

そして翌日、俺は朝早くから興宮署に来ていた。
俺は入り口近くで、ウォークマンで音楽を聴いていた。
「おや、早いですね」
署に入ってすぐに大石さんに声をかけられた。
俺はイヤホンを取った。
「少し早く家を出たんで。それに用事もありますし」
「そうですか。では早速本題に入るとしましょう。話はあちらでしましょう」
そういって大石さんは奥の誰もいない所を指差した。
「あれから何か進展はありました？」

「ええ、少しだけですが、謎はまだわからないのままです」
「そうですか・・・・・・」
「一つだけお願いがあるんですが・・・・・・」
「なんでしょう？」
「明日から雛見沢と興宮をつなぐ道に、パトカーを配置して欲しいんです。それならもし、五年目が起きた場合、雛見沢の内部の人間か外部の人間なのかはっきりするかもしれません。できれば、雛見沢に誰がきていたのかはっきりするまで、配置させてもらえばいいのですが・・・・・・」
「・・・・・・わかりました。そこに車を配置させておきましょう」
「ありがとうございます、大石さん」
俺は頭を深く下げた。
「当日は私も、祭りの会場にいます」
「あとはお願いします」
「雛見沢連続怪死事件を暴いてやりましょう！」
「ええっ！」
そうして雄斗は大石さんと別れた。
綿流しまであと二日・・・

興宮所から出ると俺はあるグラウンドに来ていた。そこに来たのは、昨日の夜に魅音から電話があり、土曜日の朝から草野球があるらしい。
そして、また昨日の夜だ。予定が無いわけがない。俺もやりたいことはある。そんな急に言われても……
そして、俺は、集合場所である興宮小学校のグラウンドに来ていた。来てしまっていたのだ。
ここでこんなことが起きようとは……

第十三話　前進・・・（後書き）

ひぐらしの彩るラジオ

黒狐「さて、今回も始まりました。『ひぐらしの彩るラジオ』パーソナリティーの風邪から復帰した黒狐です。最近、咳がちょっと出始めてますが、ではさっそく、今回のゲストをご紹介しましょう。今回のゲストはこの方っ！！！」

圭一「またまた俺、前原圭一だ。今回もよろしくー！」

詩音「園崎詩音です☆」

黒狐「今回は『ザ・クイズショウ～ひぐらしのなく頃に～』アクセス数２００００の記念として、メインの二人を紹介しました～」

詩音「・・・・・・」

黒狐「ははは・・・」

圭一「こういう雰囲気になったのは本編を読んだらわかるぜ！」

黒狐「最近は、バトスピの動画の方に力を入れてきてるからちょっと疲れてる。でも、更新は守るぜ！！！」

圭一「まあ、それならいいんだけど」

詩音「大丈夫なんですか？もうこの小説の貯金がなくなったっていってたけど」

黒狐「大丈夫大丈夫っ！何とかなるって！！！」

圭一「ポジティブすぎる・・・」

詩音「クリスマス企画とか正月企画とかこっちの小説ではやらないの？」

黒狐「やる予定だよ。さて、忙しくなるぞー！！！」

圭一「このラジオ終わった後の予定は？」

黒狐「バトスピ対戦動画『バトスタ！』のブログ更新！そして、宿題」

詩音「こっちは二の次ってこと？」
バチバチッ
黒狐「ち、ちがうからそれをおろせよっ！」
圭一「まあ、次回の話は草野球らしいな」
黒狐「ああ、この草野球と綿流しの後からが俺の腕がなるところだぜ！」
詩音「空回りだけは止めてくださいね☆」
黒狐「ひでぇ～」
圭一「ちなみにこの後の展開は？」
黒狐「もちろん秘密だ！！！」
詩音「なぜ闇明し編なのかが楽しみですね～」
圭一「そうだな」
黒狐「ストーリーの評価とか文章評価が3とか4があるんだけど、感想欲しい。どうしたらいいか素人の黒狐に教えて！！！」
圭一「ちなみにこれからのびる自身は？」
黒狐「ある！黒狐はノーチート派なんで。ってかそれが駄目なのか？」
詩音「そうかも知れませんね。チート派が多いんじゃないですか？」
圭一「まあこれから面白くなっていくんだったらいいじゃないか！なぁ！？」
黒狐「そうだよな！よし、これから超展開をめざすぞー！」
詩音「頑張ってくださいね」
圭一「がんばっ！」
黒狐「さて、今回はこの辺でっ！！！
今回のパーソナリティーは少しやる気になった黒狐と！」
圭一「前原圭一と！」
詩音「園崎詩音でっ！！！」
黒狐・圭一・詩音「「お送りしましたー！」」
黒狐「感想など待ってます！誤字・脱字などがあれば報告してくれ

れば嬉しいです。やって欲しいコーナーなども募集中っ！皆様のご協力お願いします。お気軽にどうぞっ！ツイッターもやってます。評価の方もよろしくっ！もっと面白くするためにどうしたらいいか感想くれよな！」

今回の黒狐の心の叫びっ！

黒狐「こっちもいろいろ企画やるぞっー！！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1367x/

ひぐらしのなく頃に　闇灯し編

2011年12月19日00時53分発行